つり藤ゑく　下　十

門外不出

三縁山慧照院常住物

和書門類
二五〇九七號
九六函
六架
一〇冊

内閣文庫
和書類
二五〇九七號
二三函
八架
一〇冊

内閣文庫
番號	和 25097
冊數	10 (10)
函號	202　178

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

藻塩草巻第十八目録

衣類部

衣一　綃二　被三　袂四　袖五　級六
帯七　袴八　裳九　綿十　綾十一　糸十二
錦十三　布十四　絃十五　持衣十六　織十七　縫十八
機十九 付接　帷二十　装束事サ一 かゝ　年中丨衣事ゝサ二 ゆゝ

藻塩草巻第十八

衣類部

○衣　一

あはれをしるといふ又　諸臣　あかー　に袖のたつにあかあり　さるといふ袖やとらし　小

きぬへのー　きぬのときは　秋のー　七夕　布也　かすー　○つね衣を　れんかまて

そまつなる衣をめしたるなれはさまさまにやつして衣きかへてかたみにとりかへつ

○うきーさを行り作てまんうつ衣たゝりとゆかりーしまし物とい

まへ下句にさしまし物　ゆふ　ゆた　累乃ー

うちともいくりさし見るなり

ー　日　宵にそいー　内衣のうちの内衣ふれひもろしとるあれけれそい　四位　以上　あかー　五位　あかの

よそいや余者のさしまと日のさうそくとるまうりて　いさめ又をふ又源氏のつ日のれまそいと侍臣も畫の

まうちのぬをうさとるハかせしーそされうつのよそいと

ー　六位　まー　下衣や六　ぬれ下やきとみー　みとりれ

きこの衣せのし字ハ入てものうても　小忌衣と書く　舞人の着之　派となくう

うつかわ又にふくうんとりてうて　狩ー　狩猟のうちー　ゆうりー　おりかうと

於常り　是小忌衣かるとも　ひとへなるふ又なれん　せて　さしー　きく　夏ー　ころもんともいへり　ま、うろ又ー　霞れー

霞の衣めきとうず又所てかりめ又のうもふハよてふ　やむのー　ふ

すまふなけし　ものなてるきれつしへせよめつるり

渚ちーよぬー　ましきのー　やなきのー　花ー

世父　衣せ　ひと花ー　櫻色乃袖花さうめれりうー　山吹れ

花色ー　とうさへすまなーなしく　○山吹の花色とうも主や派らく　うつうれ花のー

○仙人の月を奏て枝れ衣やふうの花のこうろもうつらん　採花れ衣とそん仙人ハ何うまき人間の袖中を埜を待られを遊ても採乃ず遊とそしくといへを告

やうり物ようを衣まもあるら説とたー　ねの屋志みのーのう

かるう添と有き袖うりあられて勘之

あ井のや志のーー　志みー　みのうめ十うとう

めー　あきうみふうめしーー　よりこー　無肉よりこー

宮すり衣
夢にめく
注はなくとも
打出を雑物に注
とよめり
紫のゆかりの一　くし一しほやのきぬ一　花すりきぬ一
くとけてうつろふこゝろ　又はさらしよう
つまされハ寝摺衣と云ことく又○為
しくてトフやれも一紫のゆかりの衣其にり○ふ美紫昭云ゆられ物にけり
ハ若紫の衣ときて人とけさこまほしふあ移りてあれめくそてさあふうつま
ゆかりをゑ衣ふりおもりゆかりふちき人ふ逢すとて紫のゆかりの衣見えり
むとふるを是れハ山うちち下りて思へうしきまりしてへまれる見せそこハよあ
なやましそり移とこの衣とんひしきれのけの見のよけれハ摺くと用ゆるのふ
れハ摺りそしもうしなや柿の移すつきを云同するやありてうつまにるうひしきれ
これはほつ衣の摺りゆるなや又うつてれさ衣をねた一
むかしふれの移をこの衣うそきうりとさん戸移りてまれるし
まし一まくそふそ摺る一　山のはの櫻あさとてと　しらきそ
るし一まくさらし
帷子とそり方斑衣とうまく
すれる衣とらめるとうし　一つとしりしける
一色ほを秋の風　うらぬれ一のまさりかさつ
色をしほりめもの　身にふけりをの一うれ　ぬれしかれ
一るきを　色とるま一ふて一　あさの一しろあさ
一あゆらの一麻の一手　あさ一
舟にあ
死とこそ　あまのさ
一あさをせ　しほる一　男子ふ一
草枕しほれてもあ
ゆきひる
しほ
あふの衣と
みし字入帯の
まや
戀一なれ一こなれ一ふるれ一　ふなり一
一旅一道すら一山ふ一野をふ一露ふ一
旅ふ一草ふ一雨ふるさし一かけ一なきう
旅衣はけ衣との
のまゆうてに
一春うけ一袖清ふ一
せえ
のこ
をゐけの一水の一た
山伏人
浦の一しほふ一皮一　すまふ一ゆくしてる
みれ一なみさの一ゆる一みつそし一ま一
摺や
一やされ一しほる一しほるま一こし浦の一すま

やつし墨染し　とよめるは未詳すまのあまのしほやき衣を　きすりやむつかしりけれはあまたれてかさねしや
とらへ乃衣はし　須磨のあまれ衣とその衣すとおりし　りし数之ひとつにまきまきをあつゝ　一の名所し
つらくし衣とはらくくと衣　からくみ衣のくし衣もりふ志をれたへし　志きれたるの衣と　のし字ありても　志
法衣へし　ゆし字ありても　うきそらし衣うきそま
て　衣落こ　孜山く　うちきるまをとわらしよ衣むのし浦よし
よるの衣さむの月の衣し孫し衣のうまの孫
うへうつや衣のせ　山かくもあり　衣の浦し衣のうつとつへてうあり　うつ珠しきぬ衣を
取さあわうせうり衣を取ちめと　あり霊蔔ようへしあり　志る苑ちりの衣　もと
さし　志き杙衣くん志衣され衣うりうり　ましきししをあらふまり　ましちしし　下つけのみうり　乙乃やアの二
たかつ杙きとつて　けようりとうく　衣し　あまた法衣の衣し　蓑きく蜻蜓羽く其翅八紋つ　とん蜻蜓のうすや紋清つやて

しけみ衣すりても落さらうり　蝶の衣し　えむしみ蝶翼衣衣やせうのえ　のうらの衣そうとけまたる
にあまつりくありとうく
とあり　あし鶴の毛し　とりの毛衣しいかれ　志ほたへ鶴　の毛衣とも
され甲斐の毛し　○うへうる孫うりさろうく言うりふ拘さのうい　の毛衣しとてつくりくりか又みふたさとなけまかせ
み万よ○つくりを○うり言うりもふうれりうるてうもうすしふ比てりうぬかさ
得ぞのきをむ仏のつくりを○まとあふかうへいのねさとを尽ろふ似さり言うりと
ゆられは白まて言うりまうりいろみてうもハいふ拘さすしよりうすしま法
かしういのけ衣ふ似よりまぬかさる事もハさうすすてつくまうりまたてよい
ふたさむへのなうういふてうりとりふむそ言のあるうふらぬうう又仏とあう
ぬうしくむむせまれそはふも伊那とうひ詞花たさハ玄苑所へあれさとあふす
あれを衣さら　うつられし　八雲法拾ふ是法文うりあり遣くやかし衣
そへうしえと　むかとそく又美苑ふ衣のすうれ破さるま
鵜の毛のむうり　きしやしの河のさ海　○つうしふそてきしや　ころものさうさ海うり
とふりしとうく
手をゆうすんとハ戒やと忠臣の法うふる道といそうて
捉れころもをさうりさまうりきつやつうふそつうゆうや　すうへす
衣とうへしてぬれハ義のみ白れとや万うをね袖を返共ありみこぬ
と返をさひれこ衣と返てさてりれてあしたへと義ふみくとそく　とされ

しのわさまじやしかうねりこのと死衣かゝこあつられた人をこうて是建井
をとしこ是井の中やと云衣とんとる死みさしまする衣にふさをわうふて足る
て姫こあつふおすわうれと文就うりうへさるこ　○衣人
又と死衣をひ足たれとゝあふ建ともなくとあり　打たるえし　のあわれ
よそ衣ひさと斫しゆきしくまろしとおかうそ衣殺良と許偕と日去也伊佐と
ひさと同ひしきこおれよそ日高〻おれよそ衣とさまへての衣とこひとうて
指春細神楽れ　みしろし　○ある宮れとのし何衣おう仍く去来より
下りし泥や　そりと杜ところの建ぬ所とよめうそ正月朔
日宮のかりりょ大うゆきと泥て般仍ようこるる方や宮のかうりよまき
所こ云仍く基後寿すもふあり同むとらしみ美泥云装めりいとよ西宮のふ
所对うんへより打さる帷子やとさしみこ云衍の对拯袍小さう衣とおとすこと
あし八雲次泥よ豊の足のしろ衣といてう下拾只衣なりへしこれと表よ
考よらこと初し又云孝武帝正崎五年朔寄陰日江衣王義萘衣をとろて宮を
うけて去の竜となして端とす帝堪よろあひて泥よ衣とをちてをとこり
ともり　ゑんけし　次衣や八雲次泥件乃ことをしとん思うけるる人のき
さうとるあり又曰思う足けしやあやふきさかし
りつうれあやふくふきさかしとこ所く亦　みそ　すへく方所袍とえうてこ
ふ品さくる袍とこけしと云死ととし　や又天下なくくむ神乃足
そたれいゆるけまそよつこけの度戸へゆたけとをちうたけや弓のたけをも
足余やこうのひろさへとを堂やぬをぬ衣こ仙人の衣いぬりる袍やしくさうし

是荒玉と云物よゆり然えり昔こぬ　をそし　西従や一をと着指や一を死人
をぬ衣とあうるすもは泥るすり　を殆よとくろ时衣とうへて
指と云せいへり天　あけし　帷偕又従と八雲次泥こ又　あしをしし
紅のさやとうし　昔と云れと云も昔衣や
源氏帰きと出
家れ衣と　あをせし　はりのし　をくの寿し　すこうめ
侍又
見憚
し　うつふすろめ乃し　是保子姫へ雑袍
の内湊の系小住　いろし　有嫁　あ
ちし　旅衣服こまろき衣こ又去つれきを序とるぞ死塩焼海士の旅衣とよ
めうや組右それ也の方のひもと禁忌さらつ二九死組　いのしきをとるこ
西指歌
へし　思ししおえのへのをとし二えり色し　みうり
けよせん玉柳　是も倡る楽乃方や足そりけらん衣裳綵とうくれ袍
や玉柳八垂宛るし只そをさうや紅云糸のひとそしそ
死
へさら　山あひのまあまし　山あひよまわうきとこ衣
文人の袖済えしりし衣ぬふ針河　という梅う枝の一とこ
衣きへとうく　おれすみのをこし来
○林涑系うりまかつり衣都りこさら
山名不るすり　紅乃うを涑し　所去ろたへれ衣あうう方よなり　紅

此ころ海乃衣ぬくをこそ乃袷乃衣のうへにきせし
ふる衣うちすてける あらさそぬひし作りおき
し夏しかもそりかね しとゝりかよそふ 着せて
うさまるしかし あつまをわかにうきつちれめ
なれとか 婦女のきぬもれ之さぬ
ふれしや みそし 直衣之うへ裲衣也 うちき の上にきやうぬ乃少繧
之袿漢書高祖紀法干之東于宜祈見於篇大祓衣婦人し衣也尺ゟ云し女圭漢
語抄作褂云字加波婦人上衣也上古又家主の著洗之とゝく うちきすとくる
とりつり ひま
しかの装束の中に裙帯領巾とてありけるや肩より
掛りうく腰ま宋女の身繩うくおなりものゝ也と天武天
皇御宇十一年三月四十八階并如此男女の装束を被省略給たる後日領巾帶
人の頂れ餝也と世乃懸帯の女なりしものゝ細比礼の等とりても首の毛ひき
のいくよはりけるなや領巾へかゝりものと あゝ 衣云ぬのやう
みもかり金非袖よとよし江又袖をかへて洗あり なれとのや上
よおりくり物をとふやまさ源氏にあこめ姿なといへりいもの ことゝ云や是
こめの外りをまとして物之又あまきにきせしより又家れ装束の下おとしたら

られあやなしのやうにかうとのとうろれあこめとそあこめとあや又法師
れきそし装束の下のりしたろすに綾とりわぬ袴をころころし 袙此字をあこめと
よむや宋人のきかうさ○世とゆをと云民の事 源氏よ○わか
うひわへのとそひよまうおりしきれ人をなし たゞすゑ あのたをきぬ引
ゆひ給人抗とあり旧例男女并に著袴の時に小袖をくさゝて襴をもち伊勢之
一条院の御ころまでは始て小袖を着し給へるうりたをさゝて白絹の
綾紋かりあふひらか白平絹すり三幅懸紐のひろさ三寸許之大略也 折敷を
治兼四年東宮安国御着袴の時着給之格存知の人なきかにゝよりてさとありて
用せらまてされ此著給
もなりてましとかし
めう世もおこの綾乃玉たまれ むたすゑかりける 志の
　○むれをきみ十わく十とりけくこう
　ひとりわとりの世くんすりうん
きみよとひとらめへしあさのきし 打ちきし
ひとへ 藤しきりおく糸とをあしひふ時くし
我をうくあれ婦連あくふ つうしみまをなう

さて（刈充）しらに中にあはれしこしとかきさね（時の紙）
せみのをはあれは経へてけるかもし　と十市色く
あさ衣さ衣しきさの衣　○しつのめかあつかうけのあさ衣をまとふ衣をはけはなからん
○絹二
ゆふ絹（幣絹之）はねくも雨ゆの（葛絹也）壱しつくし
あけ雨しあさし（人まさ中におもてそ）これあさし（信のよをりや）
○ちらまでは人をあつきてそきんかつろる物よしろくにあさしと云し
之類のをす　あさを（洗絹之）ぬれし　ぬれしぬのるし（ちれ名之）
いつれ布の（をとも衣を　さぬと云）
ふえりあり　とれしあし（春や○あしさぬハさまうしみるそ人ハ）
かあさにかぬとしぬつるなまとろみかあれ（ちれひ絹やさしそめと思なんしらぬ）
きぬのをさりのくとしてめりしかり　あさし　紫し（源氏）

かとつまのし（まくしのあやれ　るかぬに名云呉続充）うれまうめれあはれの
しりれしうまてのをりのする孫をまぬようにか
作あに努ん　ゆふさるのし　志やなるし（みかれ摘に　左方葉り）雨しれさ
さきまりあれ　をかまくき訓す
○須摩のあまの塩焼きぬの衣衣
いく志作むと　みれてひろし　雨し社さ
むきぬをかむりかまり云○むきぬのさい
くしつむ家の妹の袖のしみさて思ひの移り
ゑさいしくらんさやくうらぬのあそらしーきこをさやくくとなりく
むハさてしつうにぬそりしいのもとらふるみを云ありまぬのゆるくしつ
又家のかとはものかとすまで思ひくしも此方日女ありまぬハとありきぬ
と云充作へ　くハさいくと同又云ありまぬハありえなくる様にあつ絹
とありて殊衿の棺の名や殊衣同の也然ともあつる袖まるあらそ禁忌の
とあり是あまりのすし　万の方き心やてしをとなしありもたにぬにをまと
ゐ楽とせらまつんまつさぬとくりしをく
しくりり　をとゐや源氏よき家れ上あつき琴とり弦とらと
かけれうけをりしの　かる衣とか色つま　作るた

兄弟ー 四位は上らりのく八雲御抄や又云掾とかけ玉朔服や山きぬ云
其みつろも兄のひとく 衣其 読りつれりこれ衣ぬとえあらい
みつ皆も兄衣衣赤白黒三又ともくあらひきぬとりくへつ一いわ衣色
こうりのたみれーとわきたさらりきたまゑ ○年れ色々 兄河くちの
色といりらいもひしきぬのぬいめ
とされもろすしー色万

○被 三

うちりの被 あさのひとのふ すさしくとしらし くしー 衣の縮 まくらしー 班之
まくらとしー あさしー あさてこしー あつしー ○あつふすま おこやうちのよ
文世建其のいともと一錦く いつくるさひしも 美 うきてしー あさてしー ふつうきしー 下様 あ
きめのー 色やのしー いそとしー 是そろく とうろすり 錦やのしー よろれ
れしーゆるけのしー そらしのしー もとひわひおこやのー

おこやのした あつふすまおこや うちのた 衣色人のまくらしー ○伎倍 人のま
たら会ふ ささえたいのまおまし物とのもうかくこよ万葉第十四きえ 八郡
の名と云しを江国伊豆国よ伎倍郡不見とふし行格も西の人のききふす
まとつくるとふく私勘き
への林と名寄よ入より 物もいりしのしー もつひや 苔の
ー花のー ちりくるすり

○被 四

花れ被 草乃ー 苔のー 霜のー 志ゐれしーしーひるま
せりえー ー豊うりー ひろくと云や万寛と書てゆくらうなよくあり めそしふえ物もそ紬入りつくむかけなれくや
○まきしいもおうくれくきんりし衣被ゆふさる おさくまりし物をとよめらもめくたきみあろすり ーとまうぬ ー
しわいらもしゆるむきをとけて昰ほろや

○袖 五

あ海つ袖 あまのとしきれ乃の さし わうしみ
し霞のし山あひ乃し行くわけしあさのし白
妙乃し花りし羽し旅人乃し しの袖れ上く しふ
行くすゑ 人すゑ行るや すゑ涼のし 只墨の袖とも云 志井志ての
朋とこそいへ行まで觸織れ人のまめなるなり○推業れ霞
けさ袖を七夕おりさぬなりつけてあそれとやらん うましさ
ともの(し)ハ袖よ行くみしりしむちて也をひし
水 袖ひさるや又○大空お(も)わり袖ひつしあらなくうりかなしく霞のわか
をそてひつらん中右との方志りく山大空りしそてひめとあらなくうきとい
つるもそうりひまは霞れまちてとくらんとひるをも上句をみおひくらぬ行
ろるりをおもつりや又○武蔵野へそてひつりのまけしうしわり紫とも
とめ往まき草も霞よぬれくをひつとんひるくを又日大きしよ我そてひつと
云へみとらむよりよつるとらくそうしてそてひらてと云袖らむへしをと
云し又たてよ○声りして涙をつゆしぬ時るわり衣手のひつとうしうらん是を

ひらさらくそてひちて同りやと云し うきをくし しとりくき志く 志紀た
色見し しく まくあそて そてまくあとも云 行くあ乃し
○自分まを行くあのそてもそうるへあよ衣裳入りあを浴衣や悔らんつくあ
のそてとん何くあとち衣さ葉門の差物や羅衣おともよあり山方を源氏傳
云の巻より素性り我一の方と語傳て待れとらくみなのう袖のそてとそて文
文をあつあくうりそてとうくされとも只行くあのそてとなへ卑下の類也
鶯れし 玉きぬいとうの衣のそてくま小袖とも云 古同りやと云し光蔵玉よあり やり あくし 揺かてまる
○秋の野の草のたもとうも落おは出くまちくそてとみ由らん 花萩ふ
袖袂同物なれともの山一首の中なりしあり仁歯時ありう詠
萩をとしふあ紀入てなとい色まし されてしし お
形見よそてとあみ行くと云浴衣うひよ志不れ之 志うりをおとそいとそぬやをと云志をりと云へし あまし
へく おかるむく しおあまし乃あさ のさわのし ゆうさよ こわうも
の製 まむや しかうろ婦る萩の花ます 白妙乃し中紀お

をうつまでうれしきをおもひける 六百

におもふ車はしげきの下よめれ下道行人あまたなれ

山あひの一しまぬけはらん 源氏 くちおしのしく

ち くちすさみのおりは 秋行人乃一
尼はきこえたり

○紐 六 ひもまさるをひもめかしといふ物なり

ゆれ紐 入ひもや狩衣のひもや王 下一 さし紐八袴のおび ゆわく
おまきくれし入紐之 ひもなどあり

かしはりくさし下しやくる 今のおかまも袴れおび

とく事とや後撰に説と思

ひ一の人をうしむかう一もの人のあそらかに又この人におもふ時紐をとくといひ

されをうわり○紐ゆるして下ひもとくなどとありけり然も又歌に○思ふとも言昔

ありけん猶なれやゆふてまたゆくところのひもとけかねあそらかくもとへと云かし

たり思ふとも言はであふまじき物なれば何とくるひもそゆふてまたゆふまじ

よしなしとこのあはれ事やといひて又万葉○あふりし人をこひんとやおもふ

もまた紐下ひもとけやうらんあまたのつうしどくると詠也

○人めゆゑ上をむすびてしれぬ娘まで あれ乃一 ○あひ見ても八巻の

下ひもをとけてまつ我ぞおもひき 花の色のひもをむすぶ

笑てむなしかりしを泣む

ようきしらを梅桜の下まも 小車のましきの一ととけ入れ

て ○あきくるて花さきて紐のいとよ

をいとつてあらず花に乱ん 王くゆふ一 下紐や 花の下

これを花乃 一とき入さくる 又ときあを いつもの一とく

一 上れるや たとも

とむすぼとこの錦一れむすびをとれあひて

万 この錦ひもと色入色し 白一 一万○あまの井の用のとね

あまりつむつも

う白幼こし

くらりしめ 下一れとけぬ人れてひぬ さ秋夜む

まのとちめ

○帯 七

ゑひ 帯れるや うけれひ 雲の一 雲乃下一 ○山本の雲の

うとこし 下帯たりさき秋

まいくむすひし 玉九し右乃し去乃し ○吾妹子おれをひやむ
て語も哀めらん ましらむ妻よりきつね
吉備の
中山 まれのしゆえたのしころめのし筆乃下花
○君やさんひらとれあさくりかの まれたれし 中絶るりふよむ
しみくくのこりゆりしき翁れ下著 物之○峰なりそ
涙りしさて（し）めれてたおたのれひのむちうそす連弦船ちもおたのれ
ひらん催馬楽り○いしりそれこ海うとろりれひをとられくうきて
ひゑろりのするかれひそてたなた乃れひのおのくえたたれさり 下し下の
比方ちとなまてそろきこのれひの中たゆくんよあるとえし
し ○下のれひのみちそうくくわのあらもめくりてもありんとそ思
ふ下れひらん東著まそう人あたなよれひをまろしをひを南方ふわの所 逢り
逢らもめくつうそて井よあるんとえ人さる ぬそのきさし ふあり
之地て廻あひてむそへおくきものとひくり
大和物語云菖田舎人ふあり乃ろ人おおうりのこそてらやまとふとくてりたり
おそしとなるやくくらりゑよけかる家らめのこせまらそを急出こそてこの乃人
をみるふきくさけたらいとれしけかる子をおりてうくのおそてましみそて
またひ子のうかのいとれりし逢すらけれへるとくめてそあとまろこう井
てこしといひけれへ此おより来さらちらくてみろまいとうつくしけそそけ
れ人ゆめこえおとこうし語るわ逢よあひ語人おわこみ度語たむひとくね

りりんとりひてこれをうくさみよ志語人へとえひてれひをとくまそしとらせたりさ
てうの子れ志ぶりろれひをとらてもさりろしみきをひきゆひてもた勢
ていぬ比子の年も六七りりよなけ里比男の冬この尺うりろる人あらりけれ
るれりしけうり来れ人ぶよすんありりろこの子を長をとめをさりけ里七八
年ありて又同使よさくきて大和へ参とてぬてのわさりりやとりぬて尺
とさまてりて枝物語うものきさせ里是ろむぬての下著のぬむえんなりろ人き
れんさへよ井ありんありりろこ逢りし水くむめなめのわりえなくろ云充
とえし又こ逢よ付て英しりひもたくせそよめくゑありて又のての下著めめ
くりなるありりつ逢り こ迺のし
つくるくもろしとえし
亦逢をとしすまたつれのれひを
為不ゆ事へくわの方たすりぬ かしまのし
ひた
ちうし
常陸の国りしんれぬ神れ家の日め此けさうんのあまるある財ふ
もゑせを布乃をひとりのさあつめくく神の流おにをくや和かうう
ゆるそくよ男の名りゑさろれひれをれつうろうくろやそう逢をえてね
えりうへんさせさろをあみくさりて思男乃名あろれひなれいやりく流おまし
てろれもと男きてれうつきちうとろもてあさしく成ぬさへかい古なとの指なろす
えみ云常陸国よも男めのなけしいもとうしゐりんとそては帝とむ物とそ著ま
て井やみけさうすら男の名をとうえぬ一ろる我石をとうまて度祢の流前の丁れ
とちやて夢をと切りあへくしそ名をたくしてきをと祢直りりむもそ人てうりやそ

まへりよろう人へうかすりつゆをなれくるとむすゆれよう内へうかいうけをと
ひの拵入りまろふむすひつけりうくきとをもとわか男なれいやりうくうけ
帯のやうふ打かけつとさし山すけうらすとのやうかたりる如くうし又云帯
ふうしくら袍あれやのさち帯乃うう二とし侍く人よめりとら説もあり

しつをとーー　あやうしうなとを乃撥入りれうめて布をとれきろくとをわ志
もた帯といふへきりやをもたを内女の志りまきとそとけ乃りえの袴なる物をと
こしふあてそいるつめとら袍ふむすひ付れ共志つれた帯とらへうりしや
とうれハうみりひゆひされてとまあけうるりしくきぬの小袖なくきてす
旡帯ふてあろへし又志つもた帯もとハさされさりそるすふきゆへと云く又あさ
をたとらそ麻布をくれはたや又うつをたと云をまへ
いの布のそてをくらんとそ作りさ侍よなとしそ　志つをとーーを

ゆひされて白拷のうーそ　万○左右始て片くもあくりねそ白拷の帯もへしや衣を包わそ　右

のーうをてふ人をうけとみん　をりさいれ

ー　源氏さいうく此时の帯や ふにハふての时さすや　あーの志衣しー　志つーの帯うら

○袴　八

あちうちのさ　是ハうく狭　○あや絵引しつのさそりさらかれくを叶くあふとも打のふへてうなり

うをのー　○あつ宮ふたち帯とむり穴りひれ　うたー　叶袴のすそ并八不よま

○まふくさう洗約ふおしうくそうまかそいやりをれみりそれそ返し

わまこうぬひしうれりくさそうさ　おいろひめらん　ふ

ちーはくうをさ拵てふ　此む赤虫の非蛍の不よ泥之　さむきる文のー

源氏尼云のきれ袍や築済　くもん済う文乃ー　紅の黄なこた

の文のくろをきうや　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　内之出家者ハ

服衣差や　あまをせのー　中色りうぬえうきや此上ハつまもも源氏

○裳　九

うれも　女ハ袴の上よ裳をさ内之稽之　下ーあのー紅のむーあうう

ーわのーむー　あまハうく　よめりく　うれをのまそ乃味なとと

うれもとふりうめさううゑ

たくのやうたりくとらいそ　うれをのあー　わ気色こうの

国立公文書館
National Archives of Japan

えしひきあし　もろひきし　わさゐをとこり漆しれ
引腰をそもろひく　萩よ白ゐるわうをわき
もこうのしのひきあし　あのをたまひさ

○錦　十

こ海よしさ高麗の錦之りしのとうしゐやうしさむ　唐の京錦す
之源氏のいくし　うらうよしゐさしまくれしきゐとらあわらうよりのたもさくれなゐの錦
始てさしとらひくらゐよしゐたへいまくき袍ちらするをあ人よき
まあとやあのちのしとしもるのし花　紅葉れし
ちくのしぬれしよそのし　そんるの袍　やおは文ありもと車のし　小車とちう
うるてまわらそ紋よとれれよしゐや伊勢左神文よそは花しゐを用ゐ
とゐ絲をと小車のふしさのひりとよめ係る多し　つと車のふしさも
をとられたまてあまるねもせすたひとらくあまいつく文ある挿ひゐ
ゐさりのあるうり文よしきのひりくゐもあきえ合て

紋てよめうぬつしよしきの例れ紋小車たりよめるあうもとしあしゐみと云唐ゐ
八男りあふとそてハよりしさのもの海をゑ之を襟えりよつそとふもの
付さらとひりとハゐ之とらといつまよつくつるよや　らむせいの
文小車のよしゐたむくろ神ち山ともめくり
錦のゑとよめるし中やたしあむ　をたる袍の
ひろこる錦　○から国の錦えりをわらしとの緑をのちるぬ計うりもめ係
月報ゐ合よ玄ゐ法師よあり判云彳とうり係らん文ふく
ら見者已か子細ふまとゐり希朗詠集ふ係る織錦機中已弁お思之字とゐ文
のむよや凡ハおゑを詠ゐるりえ古人誠之れハ昔ゐゐふそりもとみしもとゐ
まえのし　追加朱買臣昇仙の後本国ゐ帰らはらんするに錦を着て故古
口へゆりんりぬとらり　漢書云朱買臣字翁子会稽人や好読
書浩長安上書武帝賢之使浩詔於金馬門為待中後遷会稽太守帝謂買臣
曰富貴不還古口如衣錦夜行子大群守意何如買稽首して辞謝す而已　心
ともゆきりしよらおしらう　たちてくや
しる　まし見あらふ　紅葉れなりく　りしし　おもふ我
名をも立もてく　いくちもたをまてしし　あしろ木

まりけ侍くあらふ　またちまひろかし

○綾　十一

やふなれ綾　紋や○やまとの綾のりふうとたもおしも𫝶と逢みくさきの
色めれなやふなる乃綾とハ色もつくれ紋のあやとしつと日
本や百詠注ニ云る霊鷲綾文とありて此方も太和抄注りしくれはとり　よる
れ紋をやうひて亦とありて入へ衣ことかよめる方やと云こ
○庭面そよくのあやと成ヨリく　くれはとり　あやの名に
れし　本れ下りけの月のさやけく　袖中抄云隆
撰は出京の法実か方は○くれはとりあやは並しくありしかも二村山も
ここしきありすき詞に大宅の法使にあつまりへ庭アリク程に始てあひまいらす
めつり云契ていそよちろりそり綾に改め定らまて召め人されて京へ論て
来ぬりしかとも此女まろあひなりしことひありつかりしかりけれハ道すそて人
の恋侍りつくれはとりと云綾と二村けしみくつりひとそてよめるとそり
くれはとりとハあやれ名や呉王れあるくより四人の姿と云也兄媛弟媛呉織
穴織やは連れくれハとりと云あやとりの名を綾ろりつけるや向云絵
撰詞よりくれハとりと云綾とりさたれハさいふ綾のまつしと安しよりあ
やとつけの名と八関にもめる苔云あやとつけの名をあやとり付たまを後撰の
詞に遠へりてす大方ハ古とは宜え方をとハ皆云アとかれく後撰を詞くとりくこ

しうあつまひりけ侍文にあやなとあるさしよりれりをすんと書たらんハ
せとを上に只詞にてそあまたもくれはとと云綾なとなくつこ書きり伊こしこえそるりこし
又此和名は綾字と訓まろに呉越おもと渭小綾やしとらくし是は付てもに呉国綾
のあ揃たりはは帝綾とくれハるとみつしとぬこしぬ又向ふ呉くれくれや
服を訓もとりくさらもふて呉服の綾とふてしも侍らんや若云孫神て皇れ法
時使を呉へつかりして縫工女をとりしめ来むかふ呉国の王四人のあやを
召つかしも中より呉織りあれをくれハるあやといしれハよく見は侍く
列はあやをとりふるすハなけれハ呉服を云て少劣見ふるや但あやとり
の名といしもしそ只呉服とそてもるぬつしくのむは名任もくは見鈍詩説抄ふ
あるくの日らくれ綾のあるや戒人云若呉の国より二むつりわきしるりあや
の名や是はまうとく二村とよむつりやあつむ従なりするなし故人日むとめあ
やとふとふむみて云二むつりハ尾列はありされくうりしくありましれるを
よりさりはとりあめまきりしく呉国より二むつりと二努よりあやはよせて
とハいつりに然的むまりそ後撰詞くとみりつ亦之是と奈良に宋延といふなる
人もきて江はくれハとりと云亦はをアさりあやなれさ一亦ありつけてあやれ
名とうくふやとふとこまきもさとあつめせとめつもあつむ亦為やまて江は全う
くふ亦るれや或書云くれハとりとふハ古方抄云あやを云文説日本大ちるに亦
ふつなりつ見そてみしあつさ三寸許るらし安名抄云あやの名とくれハ多と云
人も云あやれ名といしんとて二むつり山とハよめるく奥義抄云くまたもとより
ハ冫やの名や文皇時呉国より二端送綾やとそ我抱まうさよりとお説るそ

二人のあやとハその名也一人の名ハくれはとり一人の名ハあやはとりや一人
ハ大神宮になり一人ハ熱田宮になりと日本紀にありとぞ但此歌の詞よ
人のをこせたりけるくれハとりといふあやを二むらつゝミてかへしけるを
とそよめりとあるをおもへハあやの名にて侍るにや返考呉字を書とて読すや呉
服とはくれはとりとよめる服ハはとりとよむ人の姓にもありけるをくれ
はとりを呉服といふなるハまことに呉国の衣といふにや通侍つめりそこにこれハ
はやし呉国送物にて仍号呉文端ハむらもちむ足ともむらといふあり二むら
のあやを得たれハ二むら山にかけて侍るにや呉国より二むらをくれけるハみし
かうるりし穴をとりてを奥作にあやハくれはとりを誤ると四人に二人とうけ侍
めると云し○つちにひくも侍の衣のひとうさ糸ちくれこうりねのりすまさ
されとひまに夫木抄に綾此歌よみ からのきんとんまう
かりされと綾とも云詞見をもいく

むれ紋の唐 波のあや 波のみえぬのあやとも云り 櫻れからし

綾之源氏 いつまてよせたれや

綺 花綾之みち桜ゑのからあや之源氏○からしきや あやひとし

大内山のうしとくさまをとヘのつりさあやまろ

一天 綾緋金錦と書る蘇人此奉し あやのまてう 綾をうつり さ寮や源氏 あさ衣

之さんらんやうれ物之源氏

綾の一重うさ袮 こうしとハ紅也しとやひとへうすをと

ハひ袮り米侍袮や 源氏

○糸 十二

いと緑 糸之 下の 細しーしらーうさー夏引の

ーしつのまけー水ひさのー あひさの しら糸を あをのーを

くりのーすゝとのー手引のーてゝめのーし 河内女

みたれーあさひくー麻のうこー夏引のみれ

のまつりー 令懐云 わくてれーくりー日影のー 舞人の 衣之

ねりひのー 七夕之 まつもたー あしやにまつとりー よあり

よ海色のー ○波しく浦よる色れいとしもとかまもるて 衣のうかもてふ衣とれらん ーをまへ

これ又くるまへまうちまへなとよめる 柳の

ー 式云いと柳也又青柳れいとせいくり浮ぶまれたのーうつ

ーや又青柳をうる伊とよまりて共よあり

かしなとり色を しのびれぞ 花ぞあけぼの
老をまつても車よさくれ伊と云くこうとふ あるものゝ
これ神楽やりとれ春神楽の本なり河内也 あるしくひや
をみなへし あさらしもうりはくさかくこゑうみて
世をとうこて 名香のし 名香の扎の四角なり結たまうりいとや名香と
ともいへり 玉八様の結形よ公卿八人して抹香を備のくひよ
へるとこや源氏或ふもあらくの香を紙なり付くこそ五色れ伊とよそ結つけ
て佛入りなまうをこ云氏く云り

○綿 十三

みぬ綿 ○まつりなら富士の菓子のま井ろこも云ねの宮の名なり
以ねうん又みぬの綿ハ七月十六日之内裏のこ川さの綿なり 志
らぬむれはくしれーひとをし ○秋れくろ夜半の衣のひ
とくまたひとへ入りれそ
肉も方りはあし ○霜こふ帰夜半れ聖伏れりつけまた今そ定さをと云
あしむ もつらむ聖伏と八学師や佛名云なる肉よりと法服の
錦を語るりをおりつさく居出るなり
られをうつけまたとこひへとこと　わさはむ 綿中 帰る之あしのふ

しつくしのしも方よはあていまくこさゑとこそあ
ふしうり ○し云し海色やまとすてあつぬりうへれうへてし綿の拵
八絵ゐき○あまれ我方ハ菓子よそうなりあましとさの丸山
のたすけさりせも○ろまーも又こをたのよりくのまたなれハいつりてあ志
のむも恨し○人志まぬけりの衣れつさまたえ帰しも抑りひの数そりさ
なり 筆のこせしりさしのし またをとりてむと犯て冠の額なり
わさ花りさしの花をまたよて作や男踏云や源氏同上　さ手巾子れ冠とこふなり源氏

○布 十四

こさうれあさ布 わかちへれし 朱抜之 ゆうもてう
とり 陸奥 てはくつ花れし 陸奥 てこれのし りいのて
ふ家りゆしすてはくつを ゆるか河なりおもをくへ
ゆうもてはくつを さらししけあかろし みちのく

くいてくろせまれ布や狭布とうきくやうくゝまふうりはふとうきこてくむ
うりそ布とよむるうもこゝろくんとあしせきくりふのかそ布とひこ帰ま
もむ孫あしぬよしと讀やうくりふのせもぬのともよあり又云みちのおく
ろうるの毛しそとよりく布やおかうらぬ抽してとは布なれをりさもりも
せりくひろも尺しうけまも上すりきれこてもたくて小袖なとの地うよ
ゝおかれゝされもせなう汁をうくしてむねあをぬ由ゝ又云みちのくまの
りふ北郡より出来布やきこりうせちくてむ孫ありぬとんまゝ
とらゝ然ふ奥州ユりふとゝ郡なしとらゝ徳え倖りすそ

さし（とは何也）（あま細布）きり庵なりつ帝女うとそれう　けふの
ちしけふのせはり（これと細布同事也）あさしとみのあさし
おくし　○今も世はあ所と稱まれおくぬみく　うさひらし
さらゆられりしえせりしるりうり
よくし　○いうなれも並ふむ陰れたくぬのく狭陰由えふれ　七夕
人のあろそ陰由こぬみく數ゝ
もそ百機たそくちるし　しうたなぬのみうのこ
ぬのくうこさぬのみうのしもくわらけさうれうハわけとハやふまか
とされさうろとうろゝうくそみくことムハみれの地うふやれくうくろ代

ゝまうくろしそやまてゆたゝしき抽之りく麻のそくつゝ又云併く麻の
狭くりやとそり又云やり麻うろ布衣のつくアのすそさうるにゝえ艾
の海松よ似陰とさくこけふ北細し（遅加袖中云此抽よ書て侍しそ）
くそめとゝひ詞すり　件のぬの毛兎毛を抽の爲さよへ
て庵ょ細き穴とあきてうま一ら苧ととりして刈りくせへそようの毛のつ
きそお陰を捻つけて織ぬのやうるきくまつらえし衣物なれくせりくおそ
きゝよそまゝ例の苧をしそうのけをんあえよまろ由侍え武刈ぶ人多
○しつのめうむけりさぬみくぬきさふうつうのけのぬみく　ありとの世てさま
如是りく
と侍
あきたるなとるてふしのぬ氣とあしこ
ゝまおくてゆうきるし　桑ちるあしろのし代文
染て　○うしうあみさとそこのあさぬのとらうけし
ひ曙もも神のこと
○孫　十五　糸のとうなえまあり
ゑ乃緒（令也）いきのし日いきし日年のし　あそう
し（ゑ代とくありう）うまりてと讀ふ乃し（為之）むのしうまう色乃し　あひ

きみかけしはかのかれしあさしかけしかるへし

○乙女子かうしことのさしつまうらをとりけうむとよれるすしは忠泼かふ是をよ
つのとさまれのふやかれとうえとおをとらふつるやさしつまとら多田をと
書八木を三まさかりしくとこまく之とも神宝たとりも有物之
妻をあきとの不知也うまさり意のあるととまさるするりとをと　よふし

しよふれはかねし　結純与米純也よされとゆりんと也古との方かり
よかうはかねし　○哀てふしたうりなく海とうれ乱のつ
かねとりあきし　あく勢から純や○玉れとさあくとまらりてむすく
きん　らそゑての後をあをさうめやを万○まししをたりか志

はかうことを乃あさいはふむとらをき
ちよの衣子

○擣衣　十六

きぬた　八月十五夜始打也されおを不詠をて詠を難与源氏りを八月十
日よひさぬをくの為といふりり十日よひを十日あまりくとさし

むのこゑ　きぬふうくてつちの為　日
きうつ　衣をそうつ　きぬたうけ　あてうつ　毎擣之志つかうみおのりけさふりり又志け
をかり

格れ夢　きぬ
これ夢○志つみあうきたれ衣の秋あくしせをやくも伊ろくつちのきうふむのしよりさる
衣をとうつ月のしくうけのう衣

○織　十七

織ひめしてよきぬし布をりきくて現るうち
きぬをかりれく衣綾をきれあやたをはをたて
よ綾をゆうくとはきれとつも色乃はのきさたそ
ぬきそ　おのそそ春のぬきたしし見り又めきをとうるを見たしもまり○あし色
も母きを中ゆうふみを侍ちさを思りこそりそ縫きかんりも力
○山綾のあさてあくうけてをれそたの鈎さくとき

○縫　十八

ぬひ拘　誘鶯のかさふぬふてふ　みはくひろきぬを侍きた　ぬふてふ

○機 十九 付機あさ布を以てしたる之

あさきぬた ともにしめし いそし おもさとあしかん

縮布を以機にかけて麻といふものあり然るに後世これを作りて襟の袖の挿に布の衣
たてまへの経緯ありあさ衣れ物や縮布は其ともいふものをさらにこれをもつて
されは布をもつを撰ぶ海にふるや其もさしのあしく海かなる
りとよつて縮布を布にあつくもうすくこあるなりとて

さむとあかく

丸海 布たえとも以まのなるにもそ連となく丸かに深もるききるなり又おさきものや
又詩に常機と云なる撫柳近番右之詩文之町は機秀洛陽三月
東西郷多か工夫織は成りて
常々と機にさらくより

あさつしに色ぬける うつをた しつし の取りあり

布とさる機之杀常

○帷 二十

ちやうのくくひし うきを見るくくよ

古との
旧是は
九條の帷は三
主たるものの

このうさ之表はあつき綾中は只衣也裏はたんをんあや 源氏
○いうかをん帷子のうさよそは あとうくすへきものとやそみ

○装束をくはしく 源氏のかにあり 廿一

あやめ文乃こうちきは 萌黄 表は黄 裏は白 文也 蒔漆宝 あかちの乃まさるく

表すりう
文裏まさや

て 櫻乃かさなり

たさきは上臈女房ぬきう物之表裏を
こうは文面をうすく裏をこえや揺文の
るすや

あさて色に櫻かさね

黄文は人のきぬて
揺系ありの下かさねや

うそくき

落映や衣の
表袴たれ之

ゆるし文乃てほまとりぬのとみゆ

紅は衣ぬのうちた形か
衣かつてのやうに形や

二あひのあうちき

かさあひは紫之
こうちきに見ぬ

のすや むらさきん

平絹のすや並紋の亦をしるす
りくり位ある人のきさうら

うゐねりにて

ぬえて 絹きそうら
紅の落文常に

うとりのあをし

只絹の装束や絹の直
衣や平絹之並紋の亦

さけやもの程をつやとく ちゑのあをし

茶旋文は二つめ
きた形身めは文

也一説襖
み光え

あとよ

黄丹て濃きうり黄を
きした形物之表来さ

あやのよそい

装束する也
ようそひと

ふた藍来 うすもんのうら色 浮線綾 みちひとへ色 緯たたひとへのきぬ
のうすや
ぬくのあしは 御そ みだりきぬや經糸らうすぬきとなむ しろきのはね
みだりかぬからくうすそりうり
さ衣の時は きぬの白きか所孫之九ハ夜の物や あさらは 此姫くにを
是ハ絶此より白きを重たれとぞや男路宮時をへ 萌を夜の
うハまことをれ是 かたびらに 紀乃はし 地ハかしきよて紋て黄子
布まてをさふ之 ぬかへ之 所抱也其持弟の掛貫や大
ね換抱遠使の 志いらさ抱 女房のきう
お南着抱之 抱のすや 志ひろめは下り
さ孫志やいめてなけのくひきそ 玉衣小下りさ孫志りひとすり
をひきつくろふ時のすそ
衣のうへにうりきろうすさきもの
これうすのよきさ衣をのする
あしさし 腰着と書足乃绡 うさを
や其绡のすや
はりぬうろく いちめ笠のりきぬを うすもの物
衣て中結たれとぞ之
○其冬は绡のえく サニ
みなみのきぬ 紅のひとへ 白きうすきさ 松り

さわのこうちき 紅小袖ひれきぬ うへ紅よう 紅とうさぬ こ
うちいれあを色のうすきさあを ひろの
こうちき 紅のうきやう うへ紅うすろ きとうさぬ 志ろきひと
色 櫻乃うきさ 志ひろめのこうちき 若子おり
むら 紫うすくれ 紫とうさぬ なゐれひとへ うら山吹のうえ
こうちき 紅のうきやう 紫のうきやう うち色むうされ うしろ色と
うりしきのこうちき 紫のうきやう
うちさぬ くれなゐのひとへ かしえれうへこう
まいのこうちき むめれ绡 れりてえろし すりうのひとへ いろ 紅梅
れうえぬ 赤色乃あうちき 袴のこうちき
れきてあうそ いろうし素英 あをきぬひとへ とくしきのうえ衣

色ひろめはあをうちきに
うへはなりの紅梅　下よりうすくにほへ　色にほへ
はうりた
かりいろのこうちきに
こうちきのさね　花のひとへ　色ひろめはうすく
又もあをきのこうちき　こうそゐにほひ　うすは
はまるひとへ　色にほへのうちき
色ひそめのこうちき
やなきに（れとそこえろく　うしあをし）紅乃にほひとへ　櫻色にほへうすき
又あをいろはこうちきにさくらのさね（おりてすこし　くろうあを）
きなこうちきのうへきはあをうちき　山吹
にほひ（山吹のにほひに黄　なかり錦をうすきぬ）あをきゐろし色　のしきのうへき
色ひろめのあをうちき
まれ山吹は（おりてこうちき　ちもしうきかさね）紅にひとへ色　うら山吹乃
うへき
あをきにこうちき
うら山吹（おもて黄　裏くろうね）青きにひとへ色　又は唐あれうへき
色ひろめはこうちきに
くれなゐのしし（おりてすこし　うしあをし）あをきにをひとへ色　松
かさねのうへき

やまふきのこうちきは　うら山吹の
あをきさね（れなゐのそしき濃紫）ゐのひとへ
うへは
松のかさねのこうちき
まへは（うすきあをきうらおもてあをき　のきしゆやまふき）ゐのひとへ　こうちき
のうへは
もみちのこうちき
うへはしろき六（紅のこきうすき一　うすきあをき一　うすき紅）
ゐのひとへ　そしきのうへは　もしき
なりし

しきは
しろきやうなるひとへ　こうちきは
うへは　こうちき　松のかさね　ゐのひとへ　を
しきのうへは　そしきのこうちきは　のうさく
ら（おもくすゞしう　うらあかきを）もしきの紫と色　さくらのうへは
やまぶきのこうちきは
さくらのうへは（れなゐのそしき　うらあかきを）ゐのひとへ　あうへは
のうへは
そしきのこう紫は
あひろあれきぬ（れなゐのそすゞしう　うらもあをき）ゐのひとへ　もしき

九うし五ん
こうちきハれてうちき
あのうちむめこうちのは十一月九日より
二月まて櫻山吹三月まて藤ハ三四月まての是ハ
かりのきぬくさの時とハさめん四月中しあらせ九日より
然るに比翼をも用ゐ家や花そのころを夏物二色ある
まくのとも掛物にかそても志さしあそて志つゝ
を大や我私もしおへく文氏ぬ下てられうち志
うれ色ある流方も七を八を文十も時ふよるそとう
されたまくしくうちれ人を五よりまわりのめくさ

はしをちりさまくうちくりれぬ一ふひとゑもと
うる丹二三の孫ゑうを志さいおしとこ
夏もしめれきぬれ多く
ましくしれあしも色　松のさねのうを記　藤の孫　しろき
紅九こうしちき
あのきれ　おもくあろのうちもし　志ろきもくしの記とく
色ひそめれあうちさめ
花のうし記
四月中をあそせれきぬひとんを夜りんのひ
とへとそせいかうのましくをかりまるをうさ

ゆらまくかとの衆の日をも生衣は又絹を用ゆる
や五月五日より秋まではぬのいろへあや
めのひとへのかさね（れうそまし　ふくらニうすき）をわうのうへしきれ
ふさあひのこうちきふ　きれからきぬはひとへ
かさね（れうそうちき　うらあを）　あをきうらしき
をわうのこうちき
にてしあのひとへのかさね（れうそこうき　いうらあをし）すわうはう
きれ
あをのこうちき
をわうはあやのうへのひとへのかさね　をみなへし

しのうらしき
こあひのこうちき
もきのたそあをのひとへのかさね（めくらさすわうそ　あをうらまし）
わうはうらしき
をみなへしのあをうちき
もきのむらへのかさね（ねりくろき　うらあをし）をみなへしの
うらしき
くれなゐはこうちき
をみなへしのひとへのかさね（れうそ　黄ばみ　あをし）紅
のうらしき

あゐの文のこうちき
うへすわうのおもて色のさ紗　あをさすわうのう
うた
松のはのこうちき
おもてのおもて色のさねてあをひれひとへかはね
くちきのあをうちきて　あをひのひとへ色のは紗
をとこれ色しのうしき　をわうれこうちき
色ひろあれおもて色かさ紗　しろきうしき
おれこうちきぬ　あをうきおもて色のさ紗　おれ
うちきぬ　てあをひのこうちき　ひとへ色のは紗

うへきぬしきくしのからりおもひもしうと物あや
下もへ綾れひとへ色　ひとへまうちからあやめくちを
おくへかへ中かてしこそ六月にてとみかへし
そへきうき物んれ色より秋うちさうられこう
おききみかまくしれをり物
九月九日よつまのさねの文
きくをみちまくはめてをみさぬまくまかうき
わくへ八て用　十月よつま五きへ彼てれ氏ねれ文
きはの沾うを八うへ五すわうのうら　ひとへ三まろし　ましきつまちへ
黄まちうのうをきれ　面さうまし　かうたんのあう

ちくさ面すりをう しきしにもみちのこと森ハ そのほか三山吹のうすきこと一 うすき紅のうすき黄こすり一う
さ森すりをうれ一
おなせうく八や
紅梅に色 き筆のうらに紅
あをうすく 面白くう らすりをう 紅梅ひとへ 黄筆梅うしき
をやうのこうちき
菊 やりくさう らきうし すゆひとへ さるすうしき さひ
うあをうちき うつろひきく やもて中紫 うらあをしろのひとへ
色 松のかさねうすえ
あをきえてうちき
きもみち あもて黄文 うらすりう 紅のひとへ色 をやうのうすきぬ

あをきこうちき
もしもみち をりくをやう さしき 紅のひとへ色 さひろめの
うしき
をやうのあをうちき
ふしてもみち をもてうすき すろうき をやうのひとへ 紅れ
うしき
さひそめれこうちき
うちきぬのうす
紅のあやをうちてうちきぬてはさあひ人を
あをうちや夏冬をかけてきひをはくろふ

ともみのさためなり

此外の衣の事ハ妙音院殿師長後徳大寺殿被書進之云々

衣文目 四季并月々

正月

梅かさね おもてしろくうら紅梅此外ハ さくら梅のかさねともいふや 一重梅 おもてうらともにしろく 紅梅 此衣ハ年のうち雪月のすゑより着や 当年ハ始より是をきる也 又ハ此下の紅梅と号して是を着る 柳かさね 面白くうら紫あり 又ハ裏あをき也 ともいふて是をきる 柳重 おもてうらともに薄青也 花柳の衣 おもて白しうら青し 青柳の衣 おもて白く裏青し 萌黄の衣 おもてしろくうら青 此衣ハ正月梅比まで着也

二月

はくらの衣 面白うら紫なるべし 紅櫻 面紅うら紫 まつかさね おもてうら青 裏薄紫 薄花櫻 おもてハしろくうら紅 かはさくら おもて紫うら青 此衣ハ紅梅あり 紅のうさ梅かさねの下に是をきる 藤のうさかさね おもて紫うら薄紫 ひとへ藤 おもてうす紫 裏も紫 又ハ二月三月四月まて是をきる 八重(?)なとハ すけてて用 すゝれの衣 面紫うら薄紫 はなすゝれ おもてむらさき 裏青 はくしの衣 おもてしろ 裏紅 めなはくし 面紫 裏紅 いとはくし おもてしろく紅うらむらさき おもて紅うらむらさき しろはくし

三月

紫の衣も三月ハ是をきて用

さくらの衣 おもてしろくうら紅梅 おもてしろく紅あり 山吹の衣 おもて朽葉うら黄 やまふきかさね 花山吹 おもて黄うら薄朽葉 かさね山 山吹 面黄うら黄也 此衣ハ二月より用也 さくら かひ衣 おもてむらさきうら青 此衣を代用する人あり 若年也

四月

しゝみくさね 是衣のうち卯花の心也 面しろくうら物りし うの花衣 うらはもて志ろし 裏

ち面白くうら青くあり せうれん羽衣 裏のたちはしの想名あゆくはこと注す 面摘皮名あつかう

たりとりの衣 すしはてうらあら衣をとふとひへ此衣は多濃氏りて きくあらのあとをすりしをしれせ

すゝの弟から衣も 内たまつり呉うちくをしれ不内ねさのとふ説き

まくしれ表衣 もりうりうしての衣 面落萌黄 表落紅梅 杜若乃衣

面うらとめしき かうしむの衣 おもて志ろし うら紅 あふ日乃

うら落紅梅 衣 おもて落青 うらは黄 まつも衣 おもて志ろし うらまちしこの志やう

衣 おもてはもつく 梅の内衣をあるへし 衣ハ五月まてを用ゆへし

む おもて紅うらむらさき

五月

志やう蝶の内衣 おもてさきた ねうらあもし 花あやめ おもて白し うら青し

志やう蝶 おもてく白くうら紅五月まてしやうふあやめとてお梅を用

志やうふれかへ室にもてあらまいしろきさ

あふちの衣 おもてそ黄 うら落黒 かつき色文の衣 おもてうらこ

なでしこの衣 おもてむらさき うら花なでしこて おもてむらさき

あらなでしこ おもてうらくれなゐ此 よもぎの衣 面落

きうらこれもと黄 衣よりうさ禄あるへし うらし

ち面白くうら青白き 梅乃衣 おもてあしうら花るを此衣えいく

六月

くちうき代うり不用之

夏のれ乃衣 おもてき うら黒 みなえの衣 ころもへ入なとれと色衣

ひとへのき絹 このあ衣まくしの衣ハうらありちきをぬい

まくひ絹りさぬれ衣

七月

きくの衣 おもてき うらこまもし青 うちの衣 おもてう うらをしき 萩のさ絹 面 裏落

第二の衣八八　九月まで可用

花すゝき　これもてしろくうらうすはなだ　是も八月より用

八月

をみなへし　これもてはえき　うらもえき

あをちかのさや　これもて紫　うら白

きゝやう　これもてふたあゐ　うらあをし

しをん　これもてうすいろ　うらあをし

むれ衣　これもてこきを　うら紫

のえのや　あをくちは　うらあをしろきを

九月

きく　これもて白し　うら紫　是をさはあるべし

うつろひ菊　面紫裏あをし　或黄也　この衣　十月中比まで用也

くれなゐ　これもてあかく　うら紅

うらき九月九日

すゝきの後也

しをん　面紫裏

きはぎ　これもてしろく

きくの紋　面黄也裏

もみぢ　面紅裏

天神御衣　面青裏

なゝ井

ほしかけ　これもて

落ちうたかたうく

あさつき　これもてくちは　うらも四月より皆そめし　織物也

十月

もみぢ　冬の衣の比より用也　これもてうす白し菊のもえぎの衣より是を用也

紅葉　これもてくちはあをし　或は白　くちは菊　これもてうすあをし　或黄也　紫也　十月中用之　菊月の衣也

おのきく　又はうつろひ菊とてこれを用　まそ其ゆかりの月より衣す

十一月

こほりのかさね　これもてしろくうすあをし　裏白し　これもてふかく　これもてさくらのかさねの衣也

雪の下　これもてしろく　うらくれなゐ　あをき衣

こうばい　その月より梅を用衣也　五節より後あをきいを用衣也　梅の月の衣より

十二月

梅さくらい面白し 裏蒲梅色の衣といへども 雪の下 たもてすろ
早梅にあてんしそこの月より用之や 一物色と
同又紅梅とも云又これをてすろくうら紅梅さきに霜月 花と裏 これもてす
より紅梅とすろしされ共十二月より後用ゆ事也 わう裏あ
うし事もあるを用れや但冬五節より後こまを
用ぬしともありけ上四季

雑

松かさね これもてすうら紫色の始めと定る紅 とくさ これもてすう
時又老ても若ても着 るうらすて用ゆるや めきさあ とそ入
之六位なとも用其うう ひちう これもしてうらもちや生うすろ
うら白く表へとも色之 こけ色 うめけりて 老人着之 こしよ
きすり 空色 うす青き 吹い路 あさき八 みるいろ 黒めしき やう
ろあく路きそ 色あさうい色 うむひうめれも 老ろくいろ
之此色ぬきは紅り て 紅ぬき八黒
れもて紅ぬき紅 ひいろ 同 きれたいろ こきあさ
そし八むしきれ きく 浮るうそこ
の衣 すし衣のうへの衣とも云也 ほそなう
又禁忌之時着之衣共云色 男子流行くめとど黒な
さきとしのちらの衣
衣や又なそなりう霜之めの鬼来 紅のこくら 日天子すこへわり のさ
とつえしうり袖すしと云るすりく 比紅の大口也
黒 是ハ女房うち色まうハうへつよ
袖なくてうちうけくさうろ之 うちき 是ハうち色よみあこめ
大帷のうち色てに着ゆや りよすると衣れなり ひとへ
男女着ゆや女不定 純紋 是とろくうまく
きのもすり あこめ
ねとこ 袍 ねとこ 半臂

此條々も清光函徹注之

藻塩草巻第十八終

藻塩草巻第十九目録

食物部

食物一　飯二　餅三　粥四　酒五　菓子六

破子七　海物八　菜九　食法十　精進十一　薬十二

藻塩草 巻第十九

食物部

○食物 一

まんしかく 昭明宮と書揚設開白公卿なとを集て大饗をおこなふを云也朱器饗とも云源氏 りし
て 膳部と書供御の料理する人也源氏 御まく 彩幕去ときの料なる物也源氏又一切の祝の時出る物也 ひ入海
し くい物や源氏 とりまひつ物 とりひつ入りへるゝ物くひ物之源氏 あるし 食物まふ
けるをとふや八雲御説也又ある物なりとふあるしまうとゆへり源氏宮人
のおそなしまうとあるしまうとふと饗云く又あへまうとのあるしと云
を論去れ饗之又儀なりあるしとも云御八儀 こなしてくむ 并れとく
なり饗之又饗の字をとるなりひともあり つゝて食を
れをおちさまふ 味さあるの あちをかや あさる ゑるてし人をとふや
れや 食物まろ辞なるへし 払れ
羹をまく 源氏之すをとん食する也是八借りあらさる ゆるとうゑ
るりや又まきそとんのむるしまりいつり

掬とてゆふて春ぐり あさな夕な ねの食物とあさなといふ 小
なすり源氏 篝のとを夕なといふ
ゐ大宅ありなつかしたは契といふ神ありまたともいふ又和のくにはよれあり所
えとも小ゐ殿とかや ○大井も国のさゝものゝ名井ありゆてぐもむまし
此ゐうた但馬楽や国のさゝをのとらん国 みんとそへ 帝よ奉れをのとかや宗行
より奉る也の吹へし捨てゝれ貴や 又皇ゐ陽より名と朝出く
見勢きし施きとらく飲食をけとらあり万之○あぬゆたあわりてもすゝ
まきの聖ありぬ久ゝつちかそ飲食て肥痩○そうし伊りとあろしてある
たひさうまちへたふ是源氏之而宴に来脩饗献盃るる献盃者二人内外わゐ
執盃各ゐ司ふも労の垣下客住戸をとり施人出る中を献盃称唯曰下の階を施
待ゐ司ふ然ゐ戸茅匹久しく施人出施ふ献ゐ称唯飲一撥地放盃之後ゐ退束
脩とふを学生の入学あり時も師よ束脩れ礼と云を二字れ心脩ゐ晡やかし
さら肉十脡と一束すしく唐礼ゆるせしと本朝の令ありを代よ布一端と
師よ送やをへ学の時垣下よ着座ある人ありて酒食をきらむれるあり戸
茅といふ上戸下戸の名なふ依て酒としぬれや垣下といふる八方れるすり
有賀家八幡の施時家又の王ゆるの返王けれしてもあれすや譬ゐを日れ
饗庭よ陪伴あり也くその物施よをしをれの字也九得肉の姓ゐを九ととし
とまありあれよりといふ詞也うゐりと八朔垣下也あろしを饗く垣下よ付
よらいひの饗とういりとあれしとありひ侍うも非常やよのつ称するさ
出也甚色かれ由を謝ある詞也亡縁れ貴子也ひつの応や

○飯 二
めくん志気(きげん)下鶴小たふく物ものや源氏 虫合とらく所くは飯といひもの うて ○いとよたへすゐこれ
こゝなふ清をつと
まゝくつ井の道ゆるを
かまてもれもりし うま飯のつや ○あけしそ山井れ清ゐむす
ひけくうまい井れつとをとり
てそ出 うまい井 ねうま飯の物ともいくり 採 あさけ ひるけ
つり れ食也とらく征不倶採
ゆふけ 以上三朝飯晝飯夕飯也又夕けのおふてとふ○家ありあまり池
を笥よもりうい井とも草枕にひてしあれを旅の象りけり
れいひのくち きうや 拾遺うく 打まうま来 是よりく飯うひ 伊勢物語
まいそん ゐつけの飯也爰れくいこれ也源氏○まうやまものことりと
さまやをなれるなりたうけこのそすへをそまる

○餅 三
○ねの子へりゝ侍うさりけすへりしん三り一としもあらんりし 是源氏之
李部王記天暦二年十二月卅日徴子女王入内依主是東内代餅不て色々変く
故也即是勅着前頂史余捧之餅到殿戸付典侍田積餅盤以銀土器代同箸一双
安同器納螺莒一合是項息退而即餅莒付待女小右記元元々年四月一日左大

臣私忠仁公一献八内道子十二日子始乗上殿下同参餅四種盛銀盤同盤盛同銀
箸餅上盛也第五继時紛菖置口震盖令指侯殿下沾之敷下之付加賀典侍令奉
是頗乏恐洞未及曉敷下非恐曉更退下餅盛四杯例也三ケ一ハ四杯といふ義之
彝記延信日寛治三年正月十九日嫁娶知足院殿盛餅三杯送螺細沃懸地菖銀
坏三口例送五銀鶴一双盤上置銀箸一双餅三坏例也猪隈門院沽へ内記も三
坏なり三ケ一と三坏一具といふつかすり此餅菖ハ銀器四坏なり盛らると
中比より四数とりかりて三坏小盛らるへしされとも此相混ハ未四坏の
説とて用ゆ次に傅曰絡懸の老人といふ者ハ家を向たれハ臣ヶ生し一歳ハ正
月甲子朔四百有四十五甲子矣今季数令三之一也此老人今七十三なりたる
りあるのまゝゝまて不答して生るゝ以来の日数をとりそへていや譬ハ甲子の
日ハ六十日ニ一度まハるものや生てより四百四十五度の甲子に逢て家未
の甲子の日より今日まて三ヶ一なり当机と云り六十日の三ヶ一とふて
廿日之甲子日より計れハ矣未なりあさ故に此向答ハ十二月廿七日矣未日
のすゝ四百四十五の甲子ハ六十日まてはものなれハあまりと合て計れハ二
万六千六百六十日ゝあまりを撲算小置てよそさまにとりあとしてみる時ハ
亥の字ﾆなりて刻の字の算と見ゆくりや亥の子の餅なりつらく亥の字の
算の三ヶ一といふ詞とそれり又甲子の数をとれハ　子のことをいや周代
の十二月ハ子の月を正月なりあるよいまの十月亥の月ハ十二月也井の
ことも十月の亥なれハ自然なり相合るゝれく四の
数を忘て三ヶ一とハ源氏君のとりあへものたまふすり鏡れ餅とも

よめ里と ○千代ふても我をすゝへておこむと伝ふ鏡のをらいまゝめや 隠れいかち 合てゆよ 掻れ菜を
て飯れこすり芋菖とへて多くれうすゆうと
きりて由ひさり抱や源氏

○粥　四

すゝひあのかい ○君が代ハ方たひとれりゆのなくめく里いるふ
こと第りあへさらめやハ甲斐国長ひとの来の
粥とふてあくゞ故
粥のすやとふし 浄りえしすそいひ 粥畜源氏

○酒　五

所酒之
みき とらみ氣 清みき きよきみのひし里を誰も来てふけてとゞめり おみみき
志ろ見氣 くろき氣 志ろき氣さけ くろき氣さ
呂ろれ日あるとゞむやとふし
あむあひのし 紅しあちし さむろ山まもまあり
一献し 一日一献なり出来とふし 三室のし 酒とをんしそ清けきのしつくとうけてためてをまとみをんしぜし

く三度たされ　うこし　是ハ高祖之一ふある神也一ふある口ふて米を
酒とるともと　うこうさそ酒をつくりけるゆゑといふ
さけ　又うすさうこと侍るよしもありけれハ酒ふ成れ花といふ名ある也
とあて糞さら酒ふ白きうの傳て久れ赤ハ夜の色れ染ふ似たる故也
然る酒のことを侍く　〇いふなるのんのれまゆうゑひのさけ
くうことゝもと　きひれし　やもりしまくまめきすたりうん　ゑひの
はけとハ名ある所後お備中備後と吉備三ケ国とふ作国くふ吉備津宮と中神
伊ろく達路へ至万ふる恭とてもはけを飛さうと伊なり備ふ栗ふて　も恭ふ
てもさけを八俵れやをさけふ酔てやをもてくぬきを　ゑひのとよし
たりまて及吐つりんとしや貫て簀て簀子くといふ
ふこれかし　〇あさひるのたかうとのへともひとのさの小こま路さ
のはけふ海さらんとや小あまし路はけハ　けふありちりめやもひとつ衣とハ一盃之はまも一盃
まろ衣さけや又賤浮共ふまろ衣さけと　なりおくりすゝ　くれなゐ
ゑぬをのも　作家やふけのむようつる　きくかともめり漢ふもある　さら風ともむと
をいゆ至　ふけとろへ　よめ至　於是赤天象の衆　男の所ふ作之　みき
多めさ小　こ見すゑまうふ　神ふはけとさりつまう　さるハ酒字ともと　あうひ

のむ　ゑひたれ　はのやをとひ　酒ふ酔や　はの月乃めくく
まゑく海　霞をとくむ　はけをたちゑてさ人ゑく
てとい至至　侶る楽　此殿乃おくれはのや乃うされ
海ふ於やいゑうこ　あまこも侶馬楽之うちに居さしてとんりゑなし　指楽
さけなてうろめ之といふ　すり
こまこ八雲石說之いうふそやめしあまこ佛名の時のむ花の毋佛の名ふ注之
〇さけの名をひしつまといひし古のおほきひしつのそのそのあるうしまた
〇よろひり浴むと伊ゑくもさけのこてむを至るうりあまりしまめりも
〇おゆやけもゆうし路人れこうひのさ代まんさけりもちりこすゞ多
古同門れ京中ふてあつまり酒飲るを禁し路汚ろ之然ともしまゑ一二人
ハゆうし路ろく佛うく状やちりこをハ傾ろうあくしん血至うひあ子
つ海於うけてむと地のみく後をちつまぬとゝもふみしと伊ゑりりし田めハゑにれ
しむめうとう八雲石說や又右とふ矢うりつふ多とあろゑ努くやを
むり
酒やをされふしあり　とゑ人　たやしよう　ムや保氏　君のさめしたえし
乃衆や　うらみされうゝゑひ之保氏　のまをするる

醸の字やうりしく来とうひさせてけり　さけとゐーつよくは　けをとゐ
ゆくゝや逃押言の伝附より始まる　源氏
さうすゝ　さうれのとも
源氏

○菓子　六

こゝひと　菓子なやとそ　八雲御抄　あのえかくのこ　ことよの国より　持来密仁天皇
遣天皇崩後かくすこにも折りひみそれて　古き長方やうくみ
おまとうし力
れかりとうくちうへさう抱れ　至えりさたとのやうみとうれつくりさうあ
あう抱や又和名ハ結菓と書てむきひくゝ抱と言さらもりそ至らうさ指の
さ海ハちゐへまれハ乱形うるりみよあり
と云し哉云くるてこれむ之とそし
ろのうさ　さてほり出してなくいゑつま　源氏よ浄くゝ物ばしく
てとりうしみくろのこや　そそすゝく山形とこつうハこゑ　○折ひつふ花　みくた抱つこ
とひくたものるうとや　そそとはりたよくなるりとこし　らうし　きまう　つみ
の谷ましく上をぬて揃の蓋とあるそのきうりをえ
さう指たう抱まうり菓子つむ物るより源氏　てその　菓物や菓子　苦く源氏

○破子　七
○我をいとふいつのりむやこゝろくとるそてうらなるわりとるうしん
これハ後京極ハ家破子美しとぶ也そしてある也之

○海松　八
りあ哉　和名 海松食物のとそし 八雲御説也不知　わりみるはりめ　うみめ
うきみる　るうへのま　あのまろ　神るま　みるめなきさ
みるりひとりもよ　移たりま　うきめのみ　とるみ先
まうめ　なけるこそなつかしのすむ　出る　生る　和布
うみまでみるめ　引津邊よりあるみなのつまうれ
花はなく色たのみなめ　海之　天のめたり　猶かし
なくし出たる　うし　松　みるめ　源氏　袖ふさまうつもをあ

まの玉緒めかはつきの　かつらきさら物之或海津氏 拍之源氏

○菜　九

あさ菜に　源氏やあさなあらふ花あり　いそ菜に　同　ちるみくさにも

てふ色しのひ也　つむ中に　七草に

すり菜に　すゝなの花　拾遺詞之　ゆふなに　たびなあつもの

万○ひしほにすみひろつきてをこまかにきりまぜにするゝせ子みそのくく
あつ物これ八雲所抄之也にみあつものを食法の内のなりと

たちまちなのみなり　万さのくく

よき菜や　たゝまぜや　ひとんのさくら盛かな　庭に生ひしなれを

かれけるは　これは神楽や　末詞神楽の本にあり○よみそりも菜つ
菜やとこゝろ芹つみてたや七草のことも乃さりらし

○山かつれかきかのなりのうるはしなくさを　なり経かりまそ説めれ

○齊和　十　と　初学りあり

○けいり

○そよし野を色わかなつむらんわきもこかひかり霞て日数へぬれと拾遺拍
や○四代海若所かわる所代なれんかる　かのすゑをいろは後人影撰古拾正月
朔日なる子

○精進　十一

いとも井　伊勢か寛平の時ぞかし経云かく読みけるめとかり　いけくさ
ところし八雲所説精進掃とりくいふなるべし
此あれ色物　五穀米むき精　之凡大精進とし　ろく米のたいいとも井
しとりてもよりれて金銭
山色染とて精進をくるるや　いともゐの所まさけ　源氏やこえ　たけさう
秋のるすや　　井を片食とす拾　源氏廷式色わとし

○蘆　十二

まのこ紙め かはつきの かつらきの物之哉海漢氏
物之源氏

〇菜 九

あさなあさな 如やあさなあ らなよ光とあり
いつかは しるらめ とたえけれ
てふゐるしめと いのちそ 我かな ゆふな 七種な
すゝな ひろふのゑ ゆふなはかな 七草あつ ものゝ
拾遺詞之
万〇ひとなすよひらつきてそこよなりよりまにかるゝせそなきのくゝ
あつ物これ八雲御抄之注にみあつものて食法の内のなりな
さのかよめり万さのくゝ
たち ふりわたやりしとあり 庭に生ふりなはれを
よなかや たまこや ひとんのさくら露やとく
かれは ゐなき これは神楽や其調神楽の本末の詞〇よふそりもなつ
なやそこゐ芹つくてなや七草のとものさりくん
〇食法 十 かりのりるはなくなみなほりまそ段めれ

いくつをれとる 初学ありあり

〇はつり

〇ちよし野をわりなつむらんわきもこかひわる霞て日数へめれて拾遺抄
ふ〇四代海老ゆかるゐ代なれへかるりのまゐとくゝふ後之新撰六帖正月
朔日ゐなる

〇精進 十一

いも井 伊勢ろ寛平の時打かし給ふるて飛みるめとあり
とうし八雲御説精進弁をとりくいふなるへし
れゐれゐ物 五穀菜むき精之凡大精進之
いけくる 菜のさかいとも井 源氏や之 たけさう
山ゐ糸とて精進をきるるや 金峯
しとくゐをよりて
いもぬの頃まけ 源氏延義ゐるとし
井を片食とする指
秋のゐや

〇齋 十二

わかかへるの藥 不老不死之 雲ゐにとふ― 楽府汾漫令 此仙薬也 りく
―おいせぬ―くすり― 蓬莱洲のくすりや 人めくすり―
くれなゐの雪 あまし薬のくすりなりし人しらし うすき衣や
とらし 八雲所説や 松ニ云若仙薬乃むう せの
病の薬や 薬をうきをるきたぬ 仙薬をとるめ〳〵や〇易伽册ちらう
とらし 年のとめるかくあしぬくすりまとは
きり色の〇汝の上なりくすり求し人 しらぬかふし
をめくハたちやの山より道たえへせし 亀山
おいらし 人恋に病やむ― やまひやむ―

藻塩草巻第十九終

藻塩草巻第二十

詞部

い

いさめ 諫之 いさめ ちとむるの御此詞なとも云也又いさめせ りうるし又云いさしうすりとらし又いさなと いさとさそそ
せ云同 ひ免 いさをし 帝にまうす忠ある ことらし 功の字をいさをしとよむ いさをしなる あらく
いさよ あしきと云詞也 よりなくても いさよふ 人をいさなふ姻と云詞也 猶行と うけをいさなふて いさみてもい
いつ同 いさなけに今を見てしの 伊さし光同詞免とらし
すなる 卒余と云詞也とも云
いさら井をもや見乃あや いさらいとんちやくとも云 批詞や 伊豆乃山の辞の道なと云詞也
あしをとや又えやくのす いさく
とん昔とも云詞のすや いゆらも らんこ いさもちやを をつと を早之
いときめく 宮世めく いやをもすんなき 万宮まくてまゐうるき とすり
や

伊ともしむ いしたしりかつやうか又 只いしれしきかよあり 伊と古紀 云ひかもあよ 能無くは家と
こやうよ よろつし いとのきそ いしく志く ともいひて 伊とく うつくしき ことらく 伊やく 究畏すりか又云恐きと 云詞とらし又云いと
しして としめさか やとらく仏いく いともうしあし
も家之りしあしそをそ ろーしきや畏むく いはれむつ 古しも長高忠孝つもれる年を 志尓せれはいつくれむつわ
成よくる是よそれをるときくしの老の数さへやよけれは暑お後仰いはく
れむつとん五六三十や外来の労三十年よ成ぬ故とらや是ろりそそせれと
を添れむく そのれろや老のうすさるやよけれはとん深生をやよいしとをい
るへいそとやよとて須免又いやよそれはとらや深色いよくもえ分むとせ
又云大ねりしつのそれよる外来の名の歳三十年とえ說あり仏
不用とらく只我年すてよ三十年ふ教ぬろを老ぬとよやとらく いはさ
とも いろもとへと云むするいそ いそこ いつさくいろちとさよ
さく仏只いけもと云む免 日すや
いつら 伊つく同むく としきよの いろくしを 恙の字や
しりやと云至りのことそこ
いはら与きんしをことてしを 拾遺 りくく

うくなくと云氣く又云さく いりちの里 いかりかきくさと いふかいく
うくおもくるりせいくり 云同む家里
無風情 いりふやく 無風情 いそく 無風情 いり濃
いりさ海すしくると
もいそり無風情 伊て 伊てんへしとのくそよきといゑりいてよん
とへ言のことよきとらや又いてそよ人をせらり是を宗祇云報むをたあして 世俗ふいてやすといふ詞くすのくりよ之
つりふ詞やとらく又いてやむともえり又いそりまをともえり又いそやは
ともえり家 いくひ川く いくりへさ免いくひさ いくら 妻おいく
云の後や ましいくり日む免 らをまさ
らきりくりといゑりいく いさしわと そそといふへきやとそしやし
往りとや伊りおともや 文字をとくくさろや今をまそこ
我をなひくさりしといふ說あれとも不用りくさとよあろ いさをのを
澄さこととらく仏今さりしと云む中まあしけるり
そや今を いさせ いくそく 無風情や只 いくそく
りくとらや いりは日とや
方無 いやま いや海さ いやめけり 無風情 いやよ袖さ
風情 涼や
りみ 深無や いやそれ
くとりくりも同 いやちの家 涼をうり いくそくし いく
すききや つよ

こひしらぬ 無風情也 むやむや 心不安 いふせき いぶかしき事なり又 おぼつかなきとも云

いぶかしきとも見えぬ事なりいぶかしきなり

みゆしきひをありかくりふりたていつも見えずや いぶかしや

いぶせくとも いろくすやきてまくりき いぶかし あやしふ事かと云も

もおくもあり

いちはやく 無風情 いぶせ いやあふ いぶせ のいそく 女房也 いつ

や

くむくと いそりしく いはけなき 猛也源氏にたいりいの

きひくさいとかう

いちはやく や源氏

そく源氏 いはけなし

をれそ浴し 家強とかく急速すると やうなつむ之源氏 いつくしき や源氏 たくくむ

きむや

いさとき くのさとき や源氏 いやくるう 少さく之源氏 いとしもなし

いしこなれ ひんすけき いと伊勢 ひく気ひくし

ほくもとく深や とすうく源氏 いそ一きまくし

とむく源氏 いとまやし うとき之源氏 いとゆかし

伊方くし 賀や源氏

う いとおく 之源氏 いとさはかし 伊うろく くまそくれむ 心哉よあのき

識あるあしも又云すくれ やうす者とまり又

そうしてもなうすきなうとこやとそく源氏 いやしきやと 家早

ろ

ろうし 朝雫まろ 之源氏

ろうなう 無縁也 源氏

は

はや

もる みやそもく都すおなくなくとうと又同し ややこもたけいくり又海さうりと云ひとあり もうし

放くと

くまとく むくとそく わしよりみとむ もうる くやうとくとも もとし

ふ なうそやりしおりのかえそるりぬへ もそくなれ たけくこりし なうとうりとしたおなうと といふやこれ

くし ますや しもしきやち 愛や一 おなや 悦 もとし 云斑や されとも もうら

さし わきらつきせし ひ一つて浴者もうんとやくのまろ 友ゆうさひとそふきょうと云とそく 放埒せしとそく それ

まろ をよあり 無風情うそ もの あはれ あさくなりてひ やまた無風情 もけむ 無風情のく もよめりき

まこく 無風傳 稀之　まそくく 終之　くつろく 傳側とつくあつハ なつかしき 源氏みゆ

ちしめくしし 端々端 さ源氏　ちよ報まて

物ことしつう
ぬ姿とを云
若の宇やかなり
みるや源氏

もあしろめつをされさる事と云 源氏

み

みこや 實之 うつろし　まふなを ゆかしのね うらむや　みよろこぶ

みつうし
う宜し 源氏　みあり るきむさ 源氏 無二やさしい　まけあり 氣無之 げにかな
みなみつれしつう　み小気 とそとみ や源氏　まけ清いさる
又とふせとり 源氏
みさるけあるさ 源氏

む

むさし 抱のもたれ うらみるや　むこりすま むらさうこものくまろむ やまぬこうりふみたしとり

むの海 無風傳 外之　むとく 無風傳 裙とや　むとりもを

むしん うえ あるまひ とぶせし 源氏　法のうのり あさしうなつや 源氏ゐるもとり

へ

へつつしへつたるともつくう

みう 手を 唱や　色あん 色ぬつきや經之の世へまんとい つるも千代とつうまるとしや　色とつし　色いとと家

色あてふかし 備ありしやみ云經ちくろまを云允

や

とまふ 常みと云さとくとんふといふもはまく万不常不 止とうけるみ山城のとんうりあひえしんせとり　とく

なめ 云〇これとあつぬうしめく河乃とくるめのたゆかすなく又り ゐうこんし常徳滑や川字のさくすりいひや河の中りある岩か

との許やとくし川字
まる常滑とうけ

とあし家色 常の 低や　恥せ家 せそれ やたく家

なとの身も自由ならざるを
成せきける身なれんと云之
むすぼ　おりひとらむすかたと云又つらさとちむすも共あり
又とちめてとをあり是もあけて定ぞら伐之
うちわふ　常ふとひろうの扠松なとあり
云や江家のむすしてを云
とまなを　之歌や
とちむ　御之
とほそとゝとあく　るき之　いろとも
とき　去やときとあり早こと云や秋冬夜
まを云つきうの江
部のまきみしけるう
とほく　無風情く
もよあり
す歌せ云己時
乃るの義や
あくそ　うあくるすも
たれや源氏

所せく見　むさしやう　此係や
とら
とらそ
とおふ　曲見　唱へ　平之
ところ　動之　とくろきまあり　ゆふところき
たしきそ　ひのさそきまるすり
とむ　尋之　求之　とめてしるを求やと
めくれもとぞまりとめ来へるすり
とみ乃おや　すや　いそく
とのくふ物のう
とそのま　志りしや江又己きこしさるかなよ
も用や何すのむまを云又うさ時
とそく　ひしくや十尾とうけまて
又たえきのたと云日るや
とうを
とよつまて　外へ　くまてや来
り成てし　源氏
とう

逢坂とわりく
疎や源氏
とふりくふ　無風情なくとく
ち
ちくはふ　指とや
めしかとこのまにけるをいりて
ぬ之よくまりみさうとゝや
ちう海さわ　始さられ雅かくてちうゝく
みたりひてよく成とゝや
ちりあとまを　を付て後の指
源氏
ちりけふあつま　二佛の中にんと云や
源氏
ま
ぬ
めくし　何にまく
むせ之
ぬめり　されぬめまうめまとあり又あをぬめ
まくれぬめまと云や己さうて云日すや
れ
を

とものよへ　とものくみなふとの事く　ことこと日むし又とのりも
たとしき霜秋くあらむや各之又なとのうとらやたなり
とちあらう　蓬をくし　とち　ともも蓬や江貫之朕日より　とらくし
こあしや　りしとしあるさ秋くりみひりとも
蓬しあるさく　とりなへく　りつまとわり　とろう　蓬や
いりふむあり　ぬあり
とりなるとりあひけるり見とし　とそとあめる　りのも
る人てと同心あり　このも
ここると　としへやし　あひきらむさ又　とし
是りく　多浅男をりふ
て押ても　とさく　優にみ日本記韓ろくうく粒せ瀬共丸
せて心く又す二あらとう弥之源氏
とそもまうり絶ゑへそ給し　源氏　とほこうして　物のとらく　たひまうる
や源氏　とかしき　咲のうふあらとたれり給ゑ
ちとうや初めるく源氏　とあめ
とこつく　としあふ泊も　れとしつかさとのむや又ふちふ
之源氏　まさすや源氏
とさもあひ　源氏　蛍響くうく　とわうもく　各鏡源氏　とれりむさしく

とおけたまき　おけさう　鏡源氏　とさし海りへ　たちしきすく　源氏く
ともひのみおかしそ　とひまさうけし老　ちりふくへ年源氏

わ

わくらを　まれあり　とひ羽く　わひしら　玉ひり気也掬玉ひし　らたとい所り
わろかしく　分脳やと　人をくひ浴とふむと　わきても
えとりて　わ家良　さく八雲や詭りく

まふあまんん　あまハりのあたりのしふむへ物かう山之破あちあ
らを玉まうれをまあく　あうへてうはてりくうや

か

かしらをよしと　地形のたのり乃三あしく　○夕つく日さしやと
とへりはくる至のうち　をうしこちうてよ
王るう　かくあししつ　かくらよ　かのり子たく
とりしくし　くりしくし　同う也　ふ山く
りよもかくより　とさ海うさま　かりともよ泊くみも
とふ羽や

国立公文書館
National Archives of Japan

とよもさく　のこゑならし　くなかる　つらしとふ　帯にいひしもなし
おもしろき　ひとりなし　つらしとのあけもなかりしにより
つれもなく　うゑ　こゑふ　こりりぬ　つらしなき　あね
とひ消之　此也
○うくひすれにつたふ梅のうつろふ色ハさくらのちらのちる　なく月けぬう
たのきぬ　八月設とうけをゆかしき設を月設と　ゆかしけよら斜とよき
みえむ色のむをあらたをよられく少之也く　梅むのされよら
わくよ揚の比もうかうりし花やとうし　又ゐ侍心とらし　のつ
けふ之　いひける　のでらつゆで　のひく　のて　ことふ也之　又色のたま
[illegible]のりくきやりなりてかりしをも難さるる也○書のたさかれ人りてうつゆく
えけつくまめる八且のいへどもくえ深やかかりで色かて人ぶてらこを
おりより日むりまさだ戸れにうつくくらむいや書のた
戸時とされをふつくかろくと落とくたけりとんぬや　う
くし　ほく　じりあくをふやうみよつて之くしより　かあを
くもみのくしあつりをいふも同也之
陀こあり一説うといくすこしの後やともい玄り又うたのこくのすくも
いゐ〳〵○あつしる紀思ひとそきくかしはをもふしけりのちりひ数らん
○あつまちの道のりくなりひさち書のしとけりもあひ見てしりふあまら
きうたのこくのむや源氏をも志やうしみへとしけりつめとしり

よふかこつけしくをもりこしくりみとしり又　うり　けりく道なり
ちりことくをとり又伊さくうのをやとゆし　よりふとしり
みふ待とよる　のくちのつま　うのこく　ちのつま
ま日るすく　とふ也之
くりう　りちく　ひつすりみ書　のまあて　こしをまぬ
まり　陰すとする　や
かくろふ涼　くろゐて在之　りゐしけあ　世風情○須
かくろくあくとふや　るすのたに
しますらん立つ孫しも泰り　の杯　斜れ也く　うくし　しとよ
泪落ける神おもての云之　うかそあしき又さつすりか
み月をとこりかりりのて　やうく　うてよふ
なをし又ふゐうかなりしひ　しうしてひ成つしつちめを
みつぬよふも志挂つなきめやつこきゐつ　りくりつ又
天世けしおも志んしや先いとくれ也之　のく　くらし共
ふ説あうえさ人八傳密神之多ハ諸をも詠又ふつしせふ也之　源氏うう
たへ　その人の思ふとあひなくあきさきこそけにゑ經とらし
りこちうあをたち　けのかを之源氏　うこしけり　須也く　みくろ
　けふらん　けらん　たのてしまし　源氏
しえとふ
や源氏　のたつへん　まきし　源氏　のこりふ　さくしりこい　ちや源氏

かしてられてし　無使てや源氏　しかくもを　便る犯や　けりく
も参りし心　はりし源氏　かのまつりの　みこし　さそやうなる　や源氏　かいみて
うい子てかたうとうしへてうりの山しく又心をしそてくとりし源氏　うやまく　源氏　たかとうし
かくほしい　うけたろう　きろや源氏　うたね　頼之　源氏　うい所う
めたる人のきしいて　ぬとち　すめきると云や源氏　未詳ひたるのわくしき　之源氏
うれろしせう紙く　嘲哢せられて　之源氏　かまた色　殿うして　まかせ来すへく
さ　ひや　かく我さかい　うしれまされ　や源氏　りうけ　りんもん　れさうや源氏
かくろ色事　源氏　うしまえ　うち入はあて　れち系とうきり　めてたとしくり
さあつめてともや
よ

よまろ　たまさんたのかりうとかい　さきん人のみうや又日本記資や　よのまき　人のこぬよ　えや中のた挫
所ともりうとりしや　よしやろし　りきやせし　らてをむりうり　よそて
色のかくを心同るや
遂　金不るうりそくとしも　まえ言うりの所孫うろうり　よ所色なくこ　たとへ八たらうくた　のむ緑なとあうあさ
ろのたもをとひる無縁みさしそかきとうをうつ人たし　よしや
とひくよう色のみなく心て御みのるうをとむそ不用や
所まし　よりさらて　もくの山し　よえそ　除てく　よか　世中さよなく事六　ろうまめり只ふと
心む成へし又世よ尋　よしなれ　無用ぞく　よれ
跟人をよかせまへし　色よう不み　至源氏　よしめこそてあて　よしめき　あてや源氏　よう
めいよそをひ　や源氏　よとをりて　折こそり　さうや
法るり中子のる　とおや源氏　よりめい　よそをひや源氏
れた　よろし気

川式たより之田町とうけ又源氏ふ　たく〳〵　たくひや指古
らうかれとりくるを无便や　たゝことゝかり
とをゝとゝとも　綴多とうけ王舟子との動ゆらるや辺源
日えし　たゆまふ　氏よりをしくおかくゆえいつゝ年月を
ありとあり是を王つらふ〇〇又〇報心湯台の綴多よりきぬれとをすとれ
さうまりやか係まし是もあつふ〇〇文ゆたのよ〇たらん舟のゆるを
くれのたゆ文とゐ沈あり色〇〇達をとうしみたゆたふとも云日みゆやう
そそしとうくゆらくや物を思ひしみ万よれ頭とうくたゆたひしよあつ王是
〇物をさすひささめぬ也　ゆくらま之　ゆくよやむ
ゆしらみおろすりとゑし
体也无　海ゆゝ　去てしや云住沈王〇〇　たまたさを
風情　八回ゑすやとゝとし不用也
き　〇けるるりよふ之〇しとすゝ八思ひひふやきりひとてんなそよの
中の〇たをきかる山寺のこゑろを南町あるすゝするを思ひひくもい
ひりくつへ〇入り河とうしたるを果れてしあるそとりふや　たし
み〇〇たときえあちこちうろうけとりにふゑすとゑし
めげろ　ゆくまえ　たしやそちの王　去之をうるうと
や无風情　云くりく
ゆつさそろ　无風情又ゆつさふし　これあるて　〇ときこゑ
〇〇ゆつさを傍や　たかひや八

芸佰説之　たくふ　古くたくふむとよめるたち傍らよむをつくる
係とらく　さ趣てんさかふか低や以さ多義やさくとして共ふ
たをき　あさるの神　海をゆゝふ　たふ
りしとゑと　めくされ　やとゝと
ためや　らりたよりと　よへを　不堪や　たわおく　風流の
りへるや　とりとあ〇之　むもき
又たそやりたる　たてまつ傍　まやらく　たとく
とふ洞みりへり　色よめり
しをろりなるむし道たと　たうと紀　无風情果くもよめり
くしたとむりへり　たゝふのたうと紀なと
より　あまよつとそて　便得　てゝ　たまやすま之　たやまとき　源氏
たいくしきと　さくしきと　あむし　源氏　しくしき　巌主のむ　源氏
ふふおく　諺とりくたふらりさおく之　源氏
れ
きんまゝる　調練し　源氏

う

うたゝね たゝよし　うくや 人の羽りそよとおもひくしとしこ哉 ひきゝやとおやと云て源氏よりて候也

八心 むり うき 梅そりとあり 梅うとある　うくる 羽をりてきあきさり候也 しありやと云と書りて

うぬくち をよあり 無風情うく　うきれる 添や宿のときそありつ とよめるをそひけるき

うこもと 万よ千万 とうけ里　うこそのとおき 無風情　そ

うちぬる ぬりてむくうとめりてむしと云説あり不用也又云つよくぬる 事を云説あり万よそ訳つ宿りそやつおとも云也つよく ぬ説く 候也

うへみとて 昔の俳小あしきとまうもたしきうきやう をたしきとおやうのむさ わりむよ理をつ けうる あるく

うそまよ浦さるいし云て 無風情うく もよめ里　うて

挨当とりく ら おかれき候也　うくさめあまて うくめきあを さるや 源氏　うこ

まれきう すりとなる

うそ もや源氏　うそのわるや 源氏　うそひ

さる うきうさある むさ 源氏

つ

つそ 傳也無風情　つきとちむる つらさのきめ やと八雲抄説　つそ

つくつきひらうやと お詞としると　つくくと つらくも同む こむしつうき

つきなれ 無音なりるをハつきなしと云也 我を便宜なれむちすりとある　つれなき 無風情つ

きうき すり　つくりなき 無風情 巻の候也　つとむれ 又つとめて 昔云無風情

又つとめぬとまも　つりなん 継つき　つしやの

別不勤すり 主こしきや又つしやりすりぬ也 りへりよ別をしく　つひそたす 挨さうむき 源氏

つ色なきつ　つへくしきやさとへ 人ふくさうれ御き源氏　つきく 世ことと むき源氏

つきく　つきの本 うきりれ 御き源氏　つい

方便と 書源氏

ねなしかりの　かけきわりに　浮舟　源氏

ねざめのとこは　めくりたる　人をつくる　て心得さ

まくらに祖まさのもすさーつきゝくめさせまゐ儀也又一説月ねざめのありたるやさもくとりもてさまそうぶもむそとふかよとそし　源氏

ね

ねりまく　絹之　無風情り　くまよめり

ねやのうち　極くしてなむれつるけ　逢世物由ことそと

ねさころ　まれやもころ又出の也もころとりくりうつまもまきくとや　此義道遙院之ゑ此の義也万くり懸題とうまく此点と物事勢とありと被作之宗頼法師たあく　ろくの義とやう　あまり不用

ねよまし　絹又ましねやとも此わそねよりしと同心被へし斟しる

ねひとる　くのかりかうや　調物　相や

な

なけりしろの　ねとさりと所い　なあうてく　なけす　てくや

そひさ替れちれ時の風の吹をりうり　しふ祖之又ふりしうりとふ義や

なへく　あまり　きや

なゐ　雨る　なるく　なけり

ぬるゝ　長くかゝりとふやなりつるそなどさり実　とふを同のやまさあくゝひさ　娟とりく

なまめく　やさしきこゝろ　めきーとそれ女房

なごむ　和済之ひさうれぬとひも同す也　但又ふきぬとふをお充

なれく　あまりより行末のうとりふこ　只後世なくも此かへ家充

なそへく　なとく

なぞりふや

なそうて　なうるゝへてと　ふ相や

なうきかく　な勢りう　なとふや

なけさひ

むつれまろ儀也すつさかとふを同めくすつされれとふもなんむつなくし

なそあやなくていそう　なりて

なをさる　直や　なけこ

なき　なきくともあり　ろれ数まくふひや　なへくれ心をあるへゆう

な　ぬとの年よなくかへり無や　但み何故まにいふ儀也

なく　なふと　くせや

なりる　すり　なまむめる　ひま　つや

なにせんよ　無風情

なりて　なくそうくり　何とそりく　ちやとふや

なふなれや　なまやな　かなる

な　ちなりん　いつまでも何　そとふ儀也

なふうちあつまて　なせりうき　てくりふや

又なか中くよ　なみさ海　たくさ海　なくや　なつまましま
ありてとゐむり　なよひかなり
けつと　なとさりこと　亜風信　源氏　なまたり　そとなせ　うとゐむ
桑の手すり義羅れむすりすへくし　なふくれ　なりやう　やと云詞
とくらすりうくとやりなりすり　なりてとり　とふふ　ねくさ
すり
源氏　なとく　よきなとの　すや源氏
すり源氏　なこやう　桑やや　わらうの　源氏嫡娚日本記
ぬや源氏　なふりしり　何り慈や
しいて

ら

羅しらんや　羅う　なうあうのらうく源氏
とくらうやみ云上臈し天神荘云みらうた　らうなをく　かけ
くせ云はるやりとそしくと云他荘あり源氏　らうしたて
まつる　頌しまつる源氏

む

むさふ　とくころ所之　又むもろ彼りもゐ
煙ふむかをふ身りむせふとあり　むんなみ　日賑志た　れるとう
けふうや　むろ　むへ山りをとめつる　むつまじむ　むつさし　むしき
とうく　八宜やみ云諸とらし
さむつおくと　むすや　いまやとりつけを　又うさやくと待をとれりて
きも同むり　よありもそやくや　旅のむさやよきあらす
むもまたなを　住ふあり　を仕羽　む祢と　あるの　頌也　むとく　亜煙亜　益之只
うひをうさき　むこ　亜給之　源氏
と云く源氏　むくはあきつゐくくしれ
の字やきくさなくれそろし奏　そろしき奏
や源氏

う

うれさく　おたるてや海と云ひく又うらつけ同るやひさすり
とゐも同るすくうちらんとゐを同心りやりくや
うつろふ　うつ所之　秘もゑ万ね茉家又　うつらく　つらくくとゐ
抱の文のうつれりをあり　詞りうらしやを

め詞也信とゐふ心あるもことをなく物をとゝむるとうつらくみるとゐ
やめもあらたよみみるらしや又あらくくとゐりあさくとゐあらたなり
とゐむく
うらく　あるゐ人共いへり　うらてや又うらし
うたて　うたて白の袖ふとゐう
うて
持や又ゐふうきとゐ詞之勝義也あさ淵りなしと云詞也みう
まそくとゐむすもをりみゐ只大加のうらしとゐ心やととく
うきり同之みれとく
たまむとゐ義や
うちむれく　群也
うちあらし　きりうらやみ夷狄虜也
うちもへ　うらくのうそもゐくと　おたたてや不断の便也　海の儀也
うちはへ　浦也
うちまう
おかくる　うちすくる
せそ　無風情うく　もよめり
うかくふ　佗くとゐく
うとましと　うらめ
ゐ詞免又うとむとをむりう
とまれめとりふも同むや
め　無風情
うたうく　まえしもそ　ひ也
うう
うやまそ　うやまうす　とゐや
うらめ
つうし　あまとまかあつし
勇とゐむとむれし
うらさひしき　只さひしや煙きしう

塩ろ下のとらへらいとし衛ふすせさらる之袁すとうすもうもそでもふや又源氏よ
秋すさうりぬ袖風すしうしう吹出くうしうさひしきむちし添ゐらくへりさし
さひし
うちしるきえ　〇宇波弊無也のりしくへらくいうしと紙文
家ちとそうへもとれも面も取昭ゐうもしへるみ
きと八ちへるきさとゐ詞之うとゐしよりし大海のたすけや大きく一世らしゐ
あをへあるとゐむれる詞之とゐく又ゐ得羽室無ともりけうさしくるみ佐け分
きゐと
とゐく
うちおく　無風情
うちまと　上也
うちふえし
弐　藤の字をうらくしきとゐ時けるり也又真実のひともありけり不替も時也
実のこと又うらりし丸世らとも有り又ゐ真の字と只らともいゑり
うちはひ　うちはひうすりの池なりまうせはる拄若廣さ
うちはひ比ゐも君歌らんみ面のうちはひのとそいふ
うら
くし
うちえ　上臈しき　うちはへ源氏
うちきさる　うちそひまする　や源氏
うけ
もうも　兼従也　源氏
うちまきりして　源氏　家業の事也
うちえく
志くうしうめなさとゐやうすうり持之源氏
ぬ

のんとさぬ かゝれ詞の〻字をおもひいれしてそらにみえけり といひあてゝきこえ侍るまや源氏

の

のもゆる のへさらとゝ云詞之又の もえまゝしともあり

のひやの のひさるこ

のとやちて しつくとし たゞや源氏

のそむ 二様あり一へ望之

お

おやけなく 甲下此出之又常也 只云としくもてなし おやめしくせむ云也おや

おや縄 おやすゝくみとゝ云詞也 委流に云大つのる也とゝ云詞之とこしくもののやうり

おやめの事 おやめく せむ云又おや

ふるてこ用充○我とおのふ人をまもるにおや ふへりうしみく風のやむとれなくあり万 いふせくとゝ云詞也鬱憤とかけり 鬱悒の字をおもくしとゝあるも文鬱井一字とりふせく共よめる又むをまてりせとよめ里又おやこゝしをといふこそ くとよめる云

おほくさく

おほつひ 詞ともありされとも おやのさひとゝ云詞せ文さしのふひとと云 おや此さひとさの字と もえ用るまや

異元又おやうくのさとを大めきこと同詞元又云おや のひをとりおほくなりと云詞之ともあり

おもふゆ おもほゆるの俗世俗にまつくりしまやうの ひまゝ云也 かすもをひなりなめつるよあるを

おもとけ 無風情

おと

おもむ さけしひらくと云詞之 おもしめしとも云

おまてをき ひふくまへ なり

おほして 只たかしさらなり 当時不詠詞なり

大かさ 無風情とへ初出 〻字まゝ不詠之

おし

ひきすら 無風情

おもひさし 多し又たなるひまもいて元是世俗の詞之とこそ

おこたる 無風情

おもしさを 無風情

おろく

おのゝ太刀 のひともあるに

おりまん 物のひまりり くともあり

おもやまのとら なるや源氏

おもとり

おやこ事 まり源氏 としおや事

穂の字くをさやう なるや源氏

おほしとく天

おもしゆうを おもしますく いふ詞や源氏

おくは

おりり 奥ありまや源氏

浦あきこい に ひまかな之源氏

おもとさく志天

面白しと面目らしきや源氏　れまいらす　れいしきや古との詞

く

くさく　古との帝よりいり是も古き葉ろうしい世ても

くさく　なるほどくや但又　なるへしてもいろいろ

くくの子をといむり払ひて業中臣救み雑ことうとくく

くさくとよありされし帝のくさくと雑くのむう　ゆくさく

きく　あかれ柿りなく　くきやとそ　さうくそとそとも

とむひや源氏　詞之源氏

くし　細砕とうく源氏　くさしりうん　くさしくし　りふかや源氏

くさわい　種の手や源氏

や

やく　愛うくやみやよとん　やことえをとうみ詞之　やまらふ　誹徊之

こ　ちうれ出さもろうしとらふや世俗　やさし

おや（ー）うし分人すとむひみかりわさう　やみる　休也ねの字ハうのむと

やそのほうさ　子孫八十代まてうとうふや　やおく　破也りくちよあり　やれハともあり

やよけさを　浴色やいやらえれ人とうる浴色之　やうの抱　因指北抱や源氏

やさとほう　救国りかうひ習傳やへとあうや源氏　やしさし　むやまきく源氏

又やまうしきといつうとむやまきえ也

佐

まつと　さことりとふ詞之　佐つうかしうん　真不悲也とうし

ひ　真俗也　さくりく　真うり走やとうし走りく　さゆさて

ささやく　うつそ――之又ふさくかく　さかく

れ出くさほる紀すとふそさむ天不なしふ詞之吾帆とん

舟の帆の十ふりりれさうとふやうまよふせさうさり

万なを隨意とうけうきりましなとふ出さみさふまとふも日出く但又る

の仏すなと吾色をよあろ風のさふとうくうを風の易や而後ましんなれハ随意

れ代教へしあのさよく言　さむなし　弊とうきさくもまひかいと

のさハよく是示ハ随意也　よあり又さひいきんとも

よゐりされたる人ひかりをさへひろみひなくせらむとちらし又同日無と云ク讀ム兄
ぬぞもなりしと云や是ゆりし幣まうしてう書やとちらし○報宥ふさけるがてしこ
人ひきをん努宿さくるいやとちふさけ人ひへきんとへ人ひるひきんと云
や人ゆるひとん賄賂之いやとちふさけとん深手ゆくまけとみ或云ふ人
ひ海ひくいゆひるし　まうなく時なく　向もなくとゆる宿とさ人る
とらみえしとみこ　　く時なくとよめるもふとん
宿人なく時もなく兄と云之ひさるこや多うもよめり　まうらふ
又波の宿こう人なるまよすゝめせゆへり只様なる也　まうけん之　まうさき
海らふとらひむり○まをせるみくえ侍と志うし
ふれもえまし月をまうらふ白菊の花
まうらふ　年仕とひるや　人ぬこうん　年のをなりくとあり　万よあまえまゐるん
めくりこん
とらひむし
まうろふ
らぬ　無風情　まうもふ　無風情又さゆひ　やえをんせあり　海ことしゝり
物のうれ　あゆくらる　まさ志六　早や但未之畢竟　又早も未のひさ　まうこ六　ちや　未や
をえやまれむとらむ　まうして　勝や　まさけのさ海
無風情又何樣
やゝく至徒り
まうさせ　無風情　人めやなる脈　さうこと　至不や
海め　ふむ是ことあふらえよけく　まめたれとへ善と云詞ろうりま　やされとよけ是せらきさるりも
こしもあしとらひや　あしけ是共あらし哉
人くうこと　あきくれれこゑくさえあるゝ　ゆうしなとふりこゝし　源氏　まうゝくあうえなり　いゝくとくれ　わうぬ之　源氏
糸屛之　まめたち　まのことうち之源氏　まうみえ里
源氏
海りう志ゆり　いさくゝし哉　すゐ長之源氏　海う是の物　引出物之源氏　海是たること　まう是房　多や源氏
け
けふ　勝云ころ　むうし　くうと　云や　是とゆるく　ことされた　花也けむ
きのとゆき　是多しくを　無風情く　もよめり　常ふやゆえ
さうや
けりしさうるをなさき　みさやう
りとらひむまもうらふ花　けち免　志慮をつ　のひさ　常志う
下ゆ之源氏けしゝうえめうめとゆくろも
下もしうえあうぬ之又佐れむをあり　けさい　形勢之源氏

けはひさうさうしう　けはひたゝしく　けやけし　なや面白き物
夕となむいひや源氏　けはひとく　おそろし　きやうし
物すこしきやけき　気や源氏
物むとらや源氏　けはひこそ
うちまかせ　心や源氏　けさうし　さうさうし　きく源氏
源氏　けそうふ　あさましかるむ之源氏　きうん　家のきさき　よりふや

ふ

ふかす　ふかきよしとさきおほくさへふかきに　またふかきにはさとも　ことの外也
よこ又ふかきやうに　ふかくのむすとも　人も見ゆ也
ふかきむえ　深きるや沖をふかめてふかし　ふかさまこしの
つるあるふかめくさはへつらう
ふかきむ　不祥や日本記之　ふかまちへて　みちを
ふかりぬや源氏　ふかう　ふかうふか　ふかさやも
不用やとちりぬや源氏又ふ　ふかう　不幸さる
よりの物とも云不用物や　や源氏
ふけり　太の家く　ふたれ　ふとえ也　ふくけなふ　欲のふかきや　貪
けふしもむもあり源氏　生源氏

ふくけなれ　大きにふくくしや　ふくいとくみ
ふくよりむくやうなる源氏
くまり源氏

こ

こし　如くは酒すりてたしくおもひをやいてふめりもとしくすり
もとしいふや又其のこてよのつ孫なりにしもありて又ことにすり
うやいあらぬ桜花せふりもふかふかれ
ありふ多くあり又毎を別て
らまし　あとうとも　ありく　悉や孫のこと
よりて　あとく　くりかてれ
其うちもなくとふむくさして
こゝのしけまん　口舌伊てうるとふやす　たけりまゝしくへ浄論
口舌と云なるりしむるすりし〇人ころ紙出
けのうらさし老り世にいまくさうさう　ことなう　こととる宿さ
ぬあさいわてう是口舌のむ宛　一さみ云るそ
せ云むえさんハてとふしひなも日むやふらひらん日血書なりれ
祖のけくまりをさうひてらふおりひあとふうし
ことをうすくま　棚引とうけてれなうさとくつ孫すりと云宛たと
つと孫と同書やみてこりきなるへしと書つと本を

ありきすりくえのうり知らそあきへ〇あしうきのまうさふてあこゆう人はやよ告そうのうて棚や

無用語うくる　ことゆうきて見上

よあり

ことたるぬうくるよあり　足ぬうり　ことうりぬ不足やしくる

この面や不　あの海をれこのましき　あのとうのを

俱梨伽羅山と　あきけせて

無用語　あきかくれ　をそあくとよめうり　ふよう山て舟なりて　あくら　多や

ありま海こうりをとらねやこうりすや　の浦すくうへてもおり　あえれて　あさく　しや又云

みくしとすり面おとのうれされてみうとそ　あさくふ　あてうい

うきされてみうといふやうきくしたるく　あろくふ

ふむく文字をもくうきそのくとのふ

や万千四十八うり而流抄之但多む先例付云

あやしくと　こや　こきやふ　ことんさ　この花　このましきや　くとよあり

や是のく

こ　知やまんてあふこ　あらたう　又こうたしともおり同す

うとなくうしおり　や多と云や　或云云又こうれ

きしおやこうたれやみる底き抄やとうく又こうくとよ云

ハうしくしなやうの後やとうく畢竟是非已同す也源氏

くちみへ　是もしくしかすうり同右や又　あやうえて

りして執　とうらくしうせ云是と同源氏

きあむや　こよあく

多るりみや已るりの外の後さ　それうふとふむふ中衣りのくり源氏よそ

さくへもうつせくも同すや　さくへうるせく抱乃戸さりさう子と云抄や

目や　すれこのうみ　このゆうれめいたく　今生の面

源氏　大成なし　舎のあしう　や源氏

すもや源氏　こともゆうひさうて物とうく　源氏　こうさうまつくり　あくさめつ

うちえ入　るや源氏　古めしき　こうの中よ　異中書　之源氏　こあ

きうる　古めさうに　之源氏　とくみえ　そ度ハや源氏　ああ

え

思あけぬ　面白優なりうしく文物のひとれをうつくしきや

又数なりて　みなるや源氏又云たよりならぬとや　とん

よろつし　余之　源氏　きんたち　歎之　源氏　きんかあく
うなゐ　よれハくしや神之あくるしあさなる
むや又云あるうそふきれや源氏
て
てふ　とりふと云詞之あられてふことはあまたまじりてをあられとも
るをあまたおやしとふや或ハ花のうけれハ山桜のこあられ
とこんと云や人のあひきりホ山路毛一　とりきをとふ
おあるうもしるし此あるしまハ初めさうや　てる　詞之
人をまろさ抱とりそまてる之
ちん法り連　源氏
あ
あされ　哀をりしきりまや初めさう神の詞よ云くみめそれたしと云ひも
ありあまきをおめた除と同心く又あひしたれひをあり多ハおめ
たれく　あふこ　舎韻之　あふせ　云舎や河なし　うりよう　あ
さきくさ　とするもふきうもことさ海うくさ卉や只とそうりたる
と云や又云あふさきあのさ痛やきうさハきれ良く

又云あらきうをこちきる　あさかく　まくくハ物とをるきうとふ
もたらハをしふやとふし　や又胡の伐せ云征或するや愛
むく作りし聲をしふ先とちりむとあさむくとつり文
非うえ秋のくるア字とあさむ気出と云ハゐるうまろかく　あさえ
うあさくちるうさや化ふう
きてあさをうしふあて　あさまし　無風情　あなや
さましのこしのそさひや　無風情　あなのり　無風情
俗つり云うこし　あなの海　うりまいしとつてむいもゑく物とせ
くもふあり　いきうてひけり畢竟ハ山そ同る死
あかりしりまし　同上の叢死泣あまりハさく
しまりしきさと云死　あなほり
まくれ　無風情　あなさ海　ふく　同上　あなくうと
ころとれ
きり　あつきさあしす　ゑあしち　りやとゑく　あつのきさ
み　○あつ時をあり乃きさころかくりこしとつりさくあれハ文あく
きしと云之なくれそ人ハとらふり然をあり時をと云や又すまさみかとん
てをさえかこと云り同　あつろり　あり不てあり〻さしめと
せく又云廿年ともし　廿ゐり是る化不と不定や

あつきりを　去りちりせのありねと　あつきなめと　あつくんを
ふりを粒や多よしく　らめとらく
あるき海　無風情らく　あつ尓色木　あれうとりけと又あ
を見まあり　れゆへりきとも云むく
あ海て　あ海いて　あつきうる　ありて経やあつてんと云も
とひむく　見まやあれへとせ云く
あしりし　あ海まりきえ　あつけしきやおきや源氏
しのむや　あまりつゆのい
とあまりきき　あつけしあや　無風情　あさ　百仮や
とあり　うくえ
よう今ハあさなれと云り一とあれのうききの傍に一を
あたりもちりさむく深しもちうされの義よつくる
あたなり　あさ物
物や　何く家あ　無むく　あさしや　無風情あ
何たら云式新之　あさあさ女　あたたあ　たら抱や
不ね　拾遺よ
こと　無く　あやしれ　奇妙と云くもくれたるむや又危との義
あり　ハめとうりや又い意しあもとも云や
あやさち　無風情又拾遺尓あやかつのあ　あや尓く
れり故とりくりも蚕通れ仮や　俗よ云
あいよ

このす
すり
やむりなりと云　あやまくれうくうよ
まやありす　むうり
むやくくみ云さてもうひを成くあらきなく　あやむち　あやしむうくあ
とむやうれ泊と云しみよしなとなむまも　やめてなと云見るや　あやめ　物のあやめうり
く　あさとなく　あさうり　うううしくひさう　あやあし　善悪のむさりあ
くらりあれや　よよきれ神く
不堪や　ある色めくうくし○去う色と神くるやしハあやめ
あくともくうをとくハあやりましとりよ従の心すうり山家をくす色を　あくも
くの許へ色うとて色携を付て同袖りうけよとりよむとるし　あくもめくうよ
せたりま　うりう挨しきうや又れうと
海や又庭池なくをあれさるや　あれまく　只慕く　あ
あくうれく　無風情又あこうさす
とるも同まて　あ川ほくほく海　無風
あくし　あひもうらく　あちこなし　無風情きれうき　情
あめさうく　なれしく
あしきを　無風情又あひとまくあ　あ気
云くうをなしめくり　あくきりくしてくし　あさふ

てや
源氏
あさぢふ　流るゝ　せく源氏　あさがほ　あさなあさな氣や源氏　あさし
物ゆかしや源氏
あさくたちれ　涼みする源氏同又あさみちとも　あさくたちく
あされぶる　あさやう　や源氏
あさまし　あさくしさ之源氏同あ　をつりよとも見り同すく
あそひさり　唯妍とまうろうしき新や　源氏あそびやうすうとゝえく
あそこ　それの俄し又あ　さくさう源氏
あらぬれたつゝ　あさんたつ　や源氏
あれのきしく　あそびあけう　ひたつむや
源氏
あいあう　無愛う悪しきすゝ　真実うれしや源氏
あはれ　あらし　や源氏
あうあけ　あのこと　女楽之源氏
奥うけり
之源氏
あらひく　赤うさや又明や又方ふありしひくいろた色のしゝまあり　是赤気爻元又方よ源へもりしよありしひく日をくしぶ
まそとあり日ゑよの
あり気むや
さ

ゆたし　さうそゝふ伎やらの手を畧きてれさうしやさハけりやさハなと
ゆきり　ありみふゆやうさとふ詞りえりよへりえとらく畢竟是同じ元
ゆまとさく人をさされ夜されて又状そもよ又夕ゆきとゑ　ゆきとふを只ぢハまりし急地むりそなけ
さふ　さひようや神さひしゆひなとよめる神なりても祢ゆゑうとゆ
つるや又源氏よりのまの女楽にありしれひ王ともよひりしまく
れく上にめさ祢ゆひて作りひまを
さや　さやう　ふや
をてくれりしろく大こ◯とあり
ゆのあり　天皇の御時内裏の
ゆ門より落書に悪無善と書るを諸人不ぬ吟と思さあしめして是ハわり
しとのきさうやゆうさ篁道風の取珍うと被作しとや悪無善ハさりゐ
うり世をようしましとよむや又拾遺
ゆしなうち　ゆなりしや哉を
わさうふくえよとよめるも見ゆ也
ゑ詞と　ふゆてすりしと
ゆうり　ゆのあう　〇ゆしらりよ夜て人まで◯さしのものさやく霜
よとりうひとりぬれさゝしらま夜て人戸稀と
八哉めりと出るすまちして傍なるへの出るくを戸稀よときうしらえへあり
夜の夾ようけつ色ゆへへのひとり孫さうやうま哉をぬれ色れよの霜の作
むきふひとりめるしゝのあうさなきよりしとよめるやさしのもの
さやくらんそよ色と云同やとえしみ云ゆしらうと八色止とらし　さ
やむあく　ぢふ人のさくゆけもかりとふ波　やちうちうかなう祢のむもあり　さゆとも　あ

無風情くを よめり さゝるゝりかあれ繁けつゝ 無風情くもよめり ある

車のあるか色紙のえくを あり さちの色 無風情

ありをさて里 ありめく こゝろハときくゆく万りう人そ さゝめくハくい人耳言とりけも

さちく 卑やされくせ しらし是りく ありさ折かき さる色とはるすりう源氏あ とりり又云るゝかゝさる

やうかるう さて ありとらふ これらあ あるく

ふとうく さそうそて 無風情果 くも読り

又さすうかる さるかきの 無風情かく もよめり ありのしと

せなり

ろうや さかしハ賢くとろりし患やおと序 あまたを高きふよりて賢色を呂忽や 無風情 ありれし もよめりさ

これを又を よめる九 さくる ちそ離共事 ありけゝるく放縦也 ありとそ 無風情りくを よめり

あるふ 又とふむもあらみあり あさらむをあり さしこれつ 人をとあかつく ありしらあら

これなとのへり戸又を 舟みとらよらくく云 ありさまを 地乃としゝあるすをそしと ゆるかくそそ さかさしてとし

かうせそくありそりうな矣 せそ之く舟よ之くてふ也 さ伊つある 匹曽 あし

くく やゝくく云泡や又云ありしるをるしそく卑老同む允源氏りりけ

の往りりそきりき組つりん次ゆをそしやをとりしみすまあかりう

おけくむへるたゝ孫とそしくことを戸りこれしきをとあり ありく

まあらりてと云むもありくそく又ありりるそくりろく

くとくこきく さくうたる や源氏 ありすゝきる 央色さるやま 色共ふ源氏

ありやの木 ちいされく卸く許 又狭くやり源氏 さりことれ ありやうれことれ こりよや源氏

ありくしく ありひしきむく源氏 さひくしきく ありうとれ 早速とりくや もやとなや源氏

されもさる 首むとりくやゆえ傾ゝる狎く源氏又 さくし うすゆりをゝりているりかりもあり同心う

さまくれうへれ 是くそきりさむく されるもくれうへれ もうらりぬ折やくれかつる八展之源氏 さ

まそうとおかりとそも さうハ まそしあれ くりふむや源氏 ありもまそく さハあ 速さ云

むや 源氏 ありる色をあんそん絶てあるあ世奉ありかんつく つそくく人韻

兆やすり廿八のませ　ゆくちきをとよすけくらへのをと　雌安鱗唐
まれるより源氏
なりきし耳くしてと常のされふ付や出井の名のあさたくて夫とさく心ろ
とよすけるかとおもひしもとしすより離をつくへ心まとえてゐること　源氏

さ

さこみまくせし　まくせしんなとこ詞や又たもけまくましとまる
と同詞之　たすけまれとこ詞之まりさしてとあきたさ
とくし　天也や微めく　せりしおかゆらすやみをせ庭もはしむ
のまや　と勢野もせたしい立陽も世たえれや狭
とらく　さしれ　きーむ之おりり　さよら　清や源氏うすと
つくし　天すく出し　きる心ば井ししつり　とりきよくう
まゑるり　儀の手やこ　わきての　源氏　きよろしまり　清豆や　源氏
さこしけく　たけくしまする源氏

ゆ

ゆらふ　〇あさ果りて天ゆひ乃ゆゆたよ思へりそうけうの皆の文りりて
めやも是ハゆたとけくんとあよあさりしたとりひとよありゆ
たとへゆ子まる　ゆらふ　西横之ゆくしとりくろも日をせてたき
すりとまく　ものしるをるてさとひと日るやし
抵ようり　又ハ夜楼りい肉皆森　ゆめ　文りいてまゆめたしろり
語とてしあきめゆ　ゆめしん努之挂めくく文よ
ゆれなし　ゆるを　西風法ろく　ゆられ　たゆたされた
ゐせ　ときあり　うさく
我心之　抵くし　西風清ろく　抵序ろ　西風語第く
ものあり　ともあり
ゆゑそて　きさ庵之ゆくてのはこと　ゆする　ゆらふれ
みてとし源氏よりくり　さ源氏
よし　由としもや　ゆらひえれまける　油断や　ゆ色
とくし源氏　源氏
けえ酒正く　ゆらけとすの夜き心や汲きくくらん　ゆた
ゐ名子まれ汲きくとかたしと詞く源氏
ゐせなとやりしの小吹待く　ゆらく

め

めとしろ　めもそれうふしとふく又草木のめくむとも　めしさ
やらめめをえ陽すしくまめれめくさ出や

つらして　汐おるめ汐まて文　めくし　いとをしう　めく
ちひよふさち光らる　つもるかなとふむや　めぐしとも　無風情　めつる
うきとふなり
しけなれ　無風情此跡しともふ赴八神功皇后新羅征伐之時々度の
早て勝八無此陣ありけれしあつきらて汐路のすそとられ
てつ皇のゆくとうして松浦河に被入時ゆかりく鮎食付てあるを時めでたし
と被仰よりやなも此河をめつらしみとひたるなり

み

みつてゆくなり　みつちゆく　みそれちし　汐光なり　みしみく
かさら　さやむ　情なりむも子仮けあらなりふなり仍ては書て論
くるや　度あなり源氏にも此ちいと物のさやひあるくし
とれひ紀みとなりむさしの旅もと物のつみけまくも
此外も多唯みわけなり又ふ字と書てさやひとよめり
り　あまたも又署同しさやひらなりそひやう　つんやひ
かなひなり又まつらしまくもなり源氏　はもめりんや
物のさまとなくさ　みわれ　書とせく堪忠もなる旅なりさくら此
そ　ゆうきるくとふ源氏　まくたる旅ゑ皇又見さ奇ゑ皇なる歟

あらくうなといつなる　をけくむむくとうし只ゆけれとふむく返くろ此まし
りるしもなけさや歩の仮やみ源氏よこさふ行くるを伊つなを志らねうかや
又ふ情織をとそくるむや
共なり

し

しれおちさひまし　ふや志のよそしなとくきも　志あゆよ
志れるく万姫みむたあとりくつ　しけくをしるひ系とともやとうく　しけぬく
又志めをときそくとふもりつ物とうやうしるや　標緒とうけうく同るや
志くめくくもふや志けきとうく　房なと
草ちくよ志けくをくとも　ふるなり
志そくつ　志け見うつや志つの　志紀なま　志さり　よや
みさふまもとなよなり
為こ属八ねやあまさ　志り　渋や志りめやと　志もしく　志りしく吟の心く
とひ此仮と　とうく　志もはうく　とうく源氏　まもり
北不めや　志のし　月右なり　月不めや　志り　然や志りそ　まむとうや　志く　物ろ分
すりうや　さすり　志のりとて　然く　志のをあまつと　然や　志り　志の

しみゝ　しけきや事をしみゝうちたてよあり　其流にしみゝをいふ同しなとこそ
さとん伊へともか
とふらう同しや
しをり孫　しけくといふなりとそ　江形下る
しぬくまぬり　之努ゝとのきく　しとゝうちあれ
てなよりと又しれ
おわれてといふ
しをゝく　吟心や　しまりくを
しりくゝもくしハしのといふ
しむおてあしのを　やとしらふ
同くくりしとえんたたまり　やとらし
ゆう
しをゝく　無風情
しつてゝ　ひとへうといふ也布　うくくもくもあり
しとゝみぬゆう　しけくとくいふ也　しけきすや面も　しとくたしこと　しとゝとも同じ也
とし
返しや
しれえゝもう　やさしといふ　涓るうり
しれひ　たゝやう　おゝるう
しれ恩うゆまき　○君あひてしるへうらゆまおり影きハ社の世　次て月ゝくふ天ぬしるゐうらふまとハ物思ひ
うまへ　みつゝ
た涓漸るゝう
しるん涓く　○さしのゝふをく揃君のまとさむこ　しゝハつるとも見うり出めや人ともふ
ゆるうと志兄
つゝしゆよ　しなこゝる　同上の
候や
しる　子や源氏ふしる　ましゝ兆しゝゝくも

くの子し
とゆゝうや
まり
しう孫し　張とうく　源氏
しうとく　音遠是献　しをゝ涓於
しゆゝ　しとくは滅て　しやくとめれ　さうや源氏
しゆう慈　しれ
源氏
うし　きさゝうかなる　とふ之源氏
しれうなる　実流や　源氏
抱　しれうち物之まろ　其物之源氏
しゝこゝうし　しそひうゝのまと　ふゝく　源氏
しら
しゝらく　しむ　仙
しらふ　擬やさしらふなとにいへりみりとなる　と月むる虫しらふかといふハ求僻へ
ひ
ひたゆる　なりくといふや求と書源氏まをひさゆゝむなといつうち一向又ふてさう虫やうへくはむゝもえへされと本説ハ求や
又ふひさすうといふ涓月るり
とちし又ふ一へんといふ　ひたまらうや　ひとへ　むたえ
ち　あまもひ　とくまや
ひたくけふ　一うさまとふやひさふりてたふ又抱　涓をうしきをといふさえうり　放埒比様へ

ひたはきの紀 田のひたよろへた 康之 無風情 ひさかた 久しきや いくひさ かなしきも いかゞ
とひさし
三とゝ
ひとりとゆゑ ゆかりの一 ゆへとしらや 業の一 かく故皆此事をあそれとらし
ひさく 人をと貧顛ならぬといやう はくのむの引くなりく 風なとのすし
ゑうかえ すかし志めりた 此辨之 かけさら
杉やと
三く
ひやくり まや
ひたやこもり
直しとゝくやうく
ひめて 秘して 之源氏
ひはうなれ 無義おや ひんさ
こゝりの辨や源氏
うなまた 之源氏
ひさたけ ひきそむかはや 離 字又放字や源氏
ひらめさた 此辨や源氏
ひそいたちて 翡翠うつくしき てんやゑや源氏
ひくねるる
潜龍の徳ありて隠るとなくしく人の才学ありて隠るゝをいふ也源氏
ひそむ
ひろさる 八尺とひろさ 左云 源氏
ゑうくやうのとろあしの物 文のこ紀 葉院なり源氏
之

めくみ ○ 業の苗のむきをふきとくもらそのとおやいもよ慈わくりさん
めくみそんよしなとふむとや又ふむとなしとふゐやとゝしさ
まくもへようゝ
さとえ
ゑなすの 物の色中をふくみいりとを くらむを 藤
このつなりてらくすり晴間もなりぬ雾
まよせくるすり仲実○ きとやとりわう
のこなりうりまれりも同事也ときく
ゑとめてたちゆく
物のくらり
ゑこる めとふ詞なり
けふよ旅や
きれとりくり
まや 也おふうし
ゑをもら のまりし絲ね
ある絲や
ゑてゆて
ゑてまやまを そそみしてと 古も同し
ゑのあわく や 抱此毎
ゑてられまよするにしたえ りまも よあり
物くさく 無風情りも もよ免し
物のあるぬり 無風情りくも よめ也
ものうゝ 無風情但是ハゑれのり なとりふと同事也
ゑのめのし 無風情
ゑの香路 抱葉之 源氏
ゑとえねひてん 人かめとうきてん とりふや源氏
ゑやの孫さし くのまとのれん 志やうすり源氏
めよみしうか おられ とのま

かうと也　源氏

せ

せくゞまる　むをせばむる　まり

すゞろ　無風情く　もよめり

せんぜんなけれ　せんかたなき也　せめさくともそ　無風情かく　もよめり

せまりくる　さしせまり　くるや

す

すさむる　めでたるぬや又人もすさめぬを羽もすさめぬとよめりあいしや　と八雲の説や又いとこゝをすさめぬとつかへ人もある——やいへり　羽もくまなすんもうしぬや又すさむ　はへ愛せらくをあいぬぬを不愛や　そさむ　許容せしの詞なる　不許容とすさむるとも　すりと　とく

すゑ清水　つ井うりあるのち　つ井ふとゐも同し　そ河ふ　うつらう　とさや

そゝけるろ　人のそゝろ　色うつるり　そゝく　こゝあつなといふむや一方　つり集多無多集とうけり

あつさをむかへしつかゐるのすゞしく池水まを潜とそとく　といふなり蛍ちとの河川にあれいまもあり又手のむまもよめり

うすゑ　末の　末や　そゆく　なくゆえあるとるあり　手をさゝやかとそく　そゝむ　そく

そゝろ　のをく　論　そよ河　すそなる　むく　すへなき　無便さん　ふきさ

や又すへなし——共　又すへなくせふや　すけなう　書　無人家と　源氏　そくよめ　みよ　健や

久ようあらぬとふや源氏　すくし　しともしとおり宜健や源氏

健うりるにとふやいつてを　さえくとふ梅のにほひやうの匂へ清のまとさ

すゝく　そやうこと讀む　ふをやくしやみすゝやうともあり

すゝく　つゞく〳〵　次や　源氏　そそれあやし　数寄やそゝろく　しきや　源氏　すゝ

たゆさぬ　そこくとし　さるや　源氏　そやけりし　ゐやとそるや

藻塩草巻第二十終

大日本帝国図書之印

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan